

東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 3

# 竹 並 下 ノ 原 遺 跡

福岡県行橋市南泉 2・4 丁目所在遺跡の調査

行橋市文化財調査報告書 第 55 集

2015

行橋市教育委員会



竹並下ノ原遺跡全景（西から）



竹並下ノ原遺跡1区全景（上が北西）



ヒメコ塚古墳と八景山ニュータウン(竹並遺跡)  
(北東から)



竹並下ノ原遺跡Ⅱ区全景（東から）

## 序

本書は、平成22年度に東九州自動車道建設工事に先立ち実施しました、竹並下ノ原遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する泉地区は京都平野中央部の低台地上にあたり、近辺には、竹並遺跡や福原長者原遺跡など多くの遺跡が知られています。今回の調査では縄文時代から江戸時代にわたる、多種多様な遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、西日本高速道路株式会社九州支社 福岡工事事務所、福岡県教育委員会、地元竹並区、柳井田区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成27年3月

行橋市教育委員会  
教育長職務代理者  
教育部長 坪根 義光

## 例 言

1. 本書は、福岡県行橋市南泉2丁目691、同4丁目635ほかに所在する竹並下ノ原遺跡の発掘調査報告書である。東九州自動車道建設工事に伴い、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所の委託事業として、平成22年度に発掘調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。調査組織は第1章第2節に記す。
3. 遺構実測は伊藤昌広、今村美香、佐藤愛子、島木邦子、工藤祥子、田中すま子、谷口貞子、中島裕子、古木初子、山口佳織、山口裕平、渡邊知栄が行った。
4. 遺構写真は伊藤、山口裕平が撮影した。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
5. 遺構図の整理は松本まゆみ、山口裕平が行った。
6. 遺物の水洗・註記・接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。
7. 遺物の実測は鎌田尚子、定野美津子、松本、山口裕平が行った。また一部の作業を株式会社アーキジオに委託した。
8. 遺物写真は山口裕平が撮影した。
9. 遺構・遺物図面の浄書は松尾留衣、松本が行った。
10. 本書に使用した遺構の略号はSI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、SA（柵）、SP（柱穴）である。
11. 本書に使用した方位は、日本測地系（旧座標）による座標北である。
12. 報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。
13. 第5章の執筆はバリノ・サーヴェイ株式会社が行い、その他の執筆及び編集は、松尾、松本の協力を得て山口裕平が行った。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第1節 調査の経緯と経過 .....	1
第2節 調査体制 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 竹並下ノ原遺跡 .....	7
第1節 調査の概要 .....	7
第2節 I区の調査 .....	7
第3節 II区の調査 .....	45
第4章 結語 .....	61
第5章 付編 .....	62

## 図版目次

巻頭図版1	竹並下ノ原遺跡全景（西から）	図版 12	1. SK016（東から）
巻頭図版2	竹並下ノ原遺跡I区全景（上が北西）		2. SK017（南東から） 3. SK020（東から）
巻頭図版3	ヒメコ塚古墳と八景山ニュータウン（竹並遺跡）（北東から）	図版 13	1. SK022（東から） 2. SK023（南から） 3. SK024（南から）
巻頭図版4	竹並下ノ原遺跡II区全景（東から）		1. SK026（北から） 2. SK026（北から） 3. SK027（西から）
図版 1	竹並下ノ原遺跡の位置	図版 14	
図版 2	I区西側（上が北）		
図版 3	I区西側反転後（上が南西）		
図版 4	I区東側（上が北西）	図版 15	1. SK028（北から）
図版 5	I区東側反転後（上が南西）		2. SK029（南東から）
図版 6	I区からII区を望む（東から）		3. SK030（西から）
図版 7	1. SI002（上が南東） 2. SI002（南から）	図版 16	1. SK031（西から） 2. SK032（西から） 3. SK033（東から）
図版 8	1. SI001（北から） 2. SI003（西から） 3. SI004（南から）	図版 17	1. SK034（南から） 2. SK035（北西から） 3. SK036 土器出土状況
図版 9	1. SI004 土器出土状況（北から） 2. SI005（南から） 3. SI006（南から）	図版 18	1. SK036（南から） 2. SK037（南から） 3. SK038（東から）
図版 10	1. SI007（西から） 2. SI009（南東から） 3. SI009 カマド土器出土状況（南東から）	図版 19	1. SK040（東から） 2. SK044（北東から） 3. SK045（北から）
図版 11	1. SB010（北から） 2. SB011（東から） 3. SK013（西から）	図版 20	1. SK046（北から） 2. SD050 土層 3. SE053（北から）



図版 21	I区出土遺物 1		
図版 22	I区出土遺物 2	図版 33	3. SD005 ベルト B 断面 (西から)
図版 23	I区出土遺物 3		1. SD005 ベルト C 断面 (西から)
図版 24	I区出土遺物 4		2. SD005 ベルト D 断面 (西から)
図版 25	I区出土遺物 5	図版 34	3. SD005 土器出土状況
図版 26	I区出土遺物 6		1. SD006 西側 (東から)
図版 27	II区全景 (上が西)		2. SD006 東側 (西から)
図版 28	1. II区東側 (上が西)	図版 35	3. SD006 ベルト A 断面 (西から)
	2. II区全景 (東から)		1. SD006 ベルト B 断面 (西から)
図版 29	1. II区北側 (西から)		2. SD007 北壁土層 (南から)
	2. II区東側 (北西から)	図版 36	3. SD008 (東から)
図版 30	1. SI001 (南西から)		1. SD008 ベルト断面 (北西から)
	2. SI002 (南西から)		2. SD008 北壁土層 (南から)
	3. SB003 検出状況 (南から)	図版 37	3. SD009 (西から)
図版 31	1. SB003 (南から)		1. SD010 (南東から)
	2. SK004 (東から)		2. SA011 (南東から)
	3. SD005 (西から)	図版 38	3. 調査区土層
図版 32	1. SD005 東側 (北西から)		II区出土遺物 1
	2. SD005 ベルト A 断面 (西から)	図版 39	II区出土遺物 2
		図版 40	II区出土遺物 3

## 挿 図 目 次

第 1 図	竹並下ノ原遺跡調査区域 (1/5,000)	第 21 図	I区出土土器実測図 7 (1/3)
第 2 図	東九州自動車道路線および調査地点位置 (1/100,000)	第 22 図	I区出土土器実測図 8 (1/3)
第 3 図	竹並下ノ原遺跡の位置 (1/2,000,000)	第 23 図	I区 SK033・034・035・036・037・038・039・040・041・042 実測図 (1/60)
第 4 図	京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)	第 24 図	I区出土土器実測図 9 (1/3)
第 5 図	I区遺構配置図 (1/400)	第 25 図	I区出土土器実測図 10 (1/3・1・2)
第 6 図	I区 SI001 実測図 (1/60)	第 26 図	I区 SK043・044・045・046 実測図 (1/60)
第 7 図	I区出土土器実測図 1 (1/3)	第 27 図	I区出土土器実測図 11 (1/3・1/2)
第 8 図	I区 SI002 実測図 (1/80)	第 28 図	I区 SE053 実測図 (1/60)
第 9 図	I区出土土器実測図 2 (1/3)	第 29 図	I区出土土器実測図 12 (1/3)
第 10 図	I区出土土器実測図 3 (1/3)	第 30 図	I区出土土器実測図 1 (2/3)
第 11 図	I区 SI003・004 実測図 (1/60)	第 31 図	I区出土土器実測図 2 (2/3)
第 12 図	I区出土土器実測図 4 (1/3)	第 32 図	I区出土土器実測図 3 (2/3)
第 13 図	I区 SI005・006 実測図 (1/60)	第 33 図	I区出土土器実測図 4 (2/3)
第 14 図	I区 SI007・008・009 実測図 (1/60)	第 34 図	I区出土土器実測図 5 (2/3)
第 15 図	I区出土土器実測図 5 (1/3)	第 35 図	II区遺構配置図 (1/300)
第 16 図	I区 SB010・011・012 実測図 (1/60)	第 36 図	II区 SI001・002 実測図 (1/60)
第 17 図	I区 SK013・014・015・016・017・018 実測図 (1/60)	第 37 図	II区出土土器実測図 1 (1/3)
第 18 図	I区出土土器実測図 6 (1/3)	第 38 図	II区 SB003 実測図 (1/60)
第 19 図	I区 SK019・020・021・022・023・024 実測図 (1/60)	第 39 図	II区出土土器実測図 2 (1/3)
第 20 図	I区 SK025・026・027・028・029・030・031・032 実測図 (1/60)	第 40 図	II区 SD005・006・007・008 土層断面実測図 (1/60)
		第 41 図	II区出土土器実測図 3 (1/3)

第 42 図	Ⅱ区出土土器実測図 4 (1/3)	第 47 図	暦年較正結果の比較
第 43 図	Ⅱ区出土土器実測図 5 (1/3)	第 48 図	木材 (1)
第 44 図	Ⅱ区出土土器実測図 6 (1/3)	第 49 図	炭化材 (2)
第 45 図	Ⅱ区 SAO11 実測図 (1/60)	第 50 図	炭化材 (3)
第 46 図	Ⅱ区採集土器・石器実測図 (1/3・2/3)		

## 表 目 次

表 1	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧	表 7	Ⅱ区出土遺物観察表 1
表 2	I 区出土遺物観察表 1	表 8	Ⅱ区出土遺物観察表 2
表 3	I 区出土遺物観察表 2	表 9	Ⅱ区出土遺物観察表 3
表 4	I 区出土遺物観察表 3	表 10	放射性炭素年代測定結果
表 5	I 区出土遺物観察表 4	表 11	樹種同定結果
表 6	I 区出土遺物観察表 5		

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯と経過

本書で報告する竹並下ノ原遺跡は、東九州自動車道の建設工事（第32地点）に伴い発掘調査をした遺跡である。本調査に先立つ平成21年10月15・16日及び平成22年5月11～13日にかけて試掘調査を行った結果、広範囲に埋藏文化財を確認したため、行橋市教育委員会は福岡県教育委員会、事業主体である西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所と協議を行い、平成22年度に高速道路敷になる13,888㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査区域は全長約350mと長く国道496号線を挟むため、国道の東側をⅠ区（担当：伊藤昌広）、西側をⅡ区（同：山口裕平）と区切って調査を行った。なお調査区内には生活道路や各戸への入口などもあったため、実際に発掘調査を行った面積は10,990㎡（Ⅰ区：7,870㎡、Ⅱ区：3,120㎡）である。なお当地は『福岡県遺跡等分布地図（行橋市・京都郡編）』には周知遺跡として大車遺跡とあるが、「大車」という小字名の地点が不明であり、発掘調査対象地の大部分が字「下ノ原」であることから、竹並下ノ原遺跡（遺跡番号14075005）に名称変更した。

発掘調査は平成22年6月1日、東側のⅠ区より重機による表土剥ぎを開始した。7月1日からは人力による掘り下げを始めた。Ⅱ区は7月6日より表土剥ぎを開始し、8月9日より発掘作業員を投入した。遺構の掘り下げと併行して調査区内に測量用の10mグリッドを設定し、縮尺100分の1で平板図（遺構配置図）、同20分の1で遺構実測図を作成していった。遺構の写真撮影は35mm白黒フィルム、35mmカラーリバーサルフィルム及びデジタルカメラを使用し、調査の進展に従い順次行った。Ⅱ区の調査は10月末に終了したがⅠ区は年をまたいで年度いっばいの3月31日に現地における発掘調査を終了した。なお調査終了間近の3月19日には現地説明会を行った。

遺物の復元や実測、遺構図の製図などの整理作業は、調査担当者の伊藤と山口の下で平成23年度より断続的に行ってきた。平成24年度にはⅠ区にあったヒメコ塚古墳の整理を本格化させ調査報告書を刊行する準備を進めてきたが、年度途中で伊藤が急逝したため刊行を平成25年度に延ばし、残務を小川秀樹が引き継ぎ刊行を行った。その後、竹並下ノ原遺跡Ⅰ区の整理を山口が引き継ぐこととなり、平成26年度にⅡ区の整理作業と併せて行い、本書を刊行する運びとなった。調査体制は次節に示す通りである。

## 第2節 調査体制

### 現地調査（平成22年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	徳永文悟（～10月8日）
		教育長	山田英俊（10月9日～）
		教育部長	三角正純
調査		教育部文化課長	酒井和宣
		教育部文化課長補佐兼文化財保護係長	小川秀樹
		教育部文化課文化財保護係	伊藤昌広（調査担当）
		教育部文化課文化財保護係	中原博
		教育部文化課文化財保護係	山口裕平（調査担当）
庶務		教育部文化課文化振興係長	辛嶋智恵子
		教育部文化課文化振興係	北田千砂子

### 発掘調査作業員

赤波江静代 有松優子 今村美香 岩崎末子 大石由香 大谷睦美 大地美津代  
大村英幸 小副川若子 小野田トミエ 角田義彦 木村守雄 清原敏伸 工藤祥子

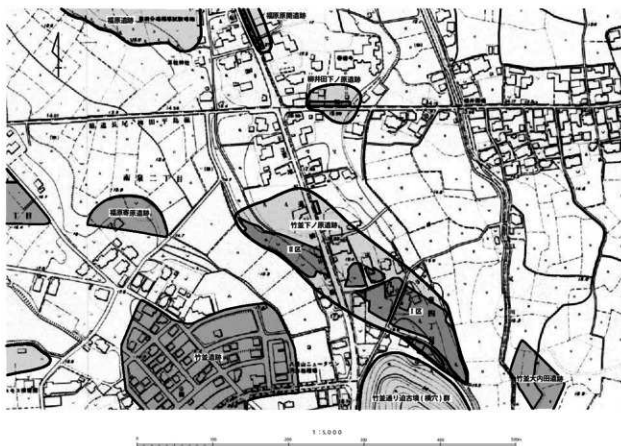
倉智万数雄 小淵八寿子 小見義治 佐藤愛子 品川宗平 柴村孝子 島木邦子  
 嶋田和子 白川豊 新保初枝 末永修崇 鈴木政信 瀬戸早苗 武田加苗  
 田中すま子 谷口貞子 豊田九州己 中島裕子 長谷川進一 浜内房義 廣津郁子  
 古木初子 松尾公子 松下節子 丸山眞治 蓑干カズノ 宮崎和子 宮崎弘子  
 山口佳織 山本要二 吉田幸子 渡邊知榮

報告書作成(平成26年度)

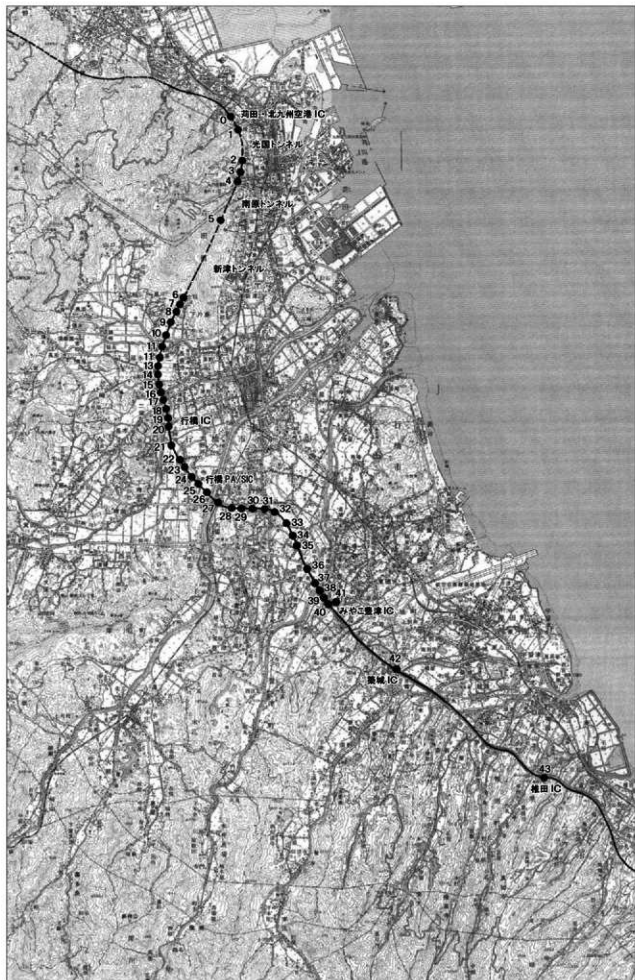
総括	行橋市教育委員会	教育部長	山田英俊(～10月8日)
		教育部長	灰田利明(～9月30日)
		教育部長	坪根義光(10月1日～)
調査		教育部文化課長	小川秀樹(～9月30日)
		教育部文化課長	亀田秀雄(10月1日～)
		教育部文化課 参事兼文化財保護係長	小川秀樹(10月1日～)
		教育部文化課 文化財保護係長	辛嶋千恵子(～9月30日)
		教育部文化課 文化財保護係	中原博
		教育部文化課 文化財保護係	山口裕平(報告書担当)
庶務		教育部文化課 文化振興係長	高尾信次郎
		教育部文化課 文化振興係	森雅代
		教育部文化課 文化振興係	入生佳奈
		教育部文化課 文化振興係	田坂彩

整理作業員

枝吉恵美 奥野康代 鎌田尚子 佐々木豊子 定野美津子 松尾留衣 松本まゆみ



第1図 竹並下/原遺跡調査区域(1/5,000)



第2図 東九州自動車道路線および調査地点位置 (1/100,000)

地点	工事件名	道路名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
0	苅田IC	雨産遺跡群	京都郡苅田町大字雨産		H12・13	4,000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨産	1,700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字櫻	4,500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字櫻・馬場	13,100	H16・ 20・21	1,200		H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35,300	H18・19	3,900	H19・20	H24	4集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32,100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30,600	H18・ 20・21					
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10,700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24,200	H20～22	5,000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29,600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21,500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字同崎・上片島	18,200	H20	8,440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7,500	H20	6,180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12,200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17,500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉園	24,810	H22	24,810	H19～23	H23～26	2・9・ 11・18集	
16	福岡		行橋市吉園	4,400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉園	5,100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉園・下檢地	82,500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下檢地	12,710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上檢地・下檢地	20,650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上檢地・中川・大野井	19,190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4,820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10,050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16,100	H20	6,360	H21・22	H25	12集	
25	福岡	宝山寺ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46,620	H20・21	31,550	H22～	H25	12集	
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14,710	H20・21	2,900	H22	H25	12集	
27	福岡		行橋市流末	840						遺跡なし
28	福岡	矢留堂ノ南遺跡	行橋市矢留	18,590	H20	12,750	H21～23	H26	19集	
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7,000	H20・22					遺跡なし
30	福岡	福原長者原遺跡 福原安原遺跡	行橋市南泉	18,774	H19～22	16,574	H22～	H25	13集	
31	福岡	福原安原遺跡	行橋市南泉	10,950	H21	3,300	H21	H25	13集	
32	福岡	竹並下ノ原遺跡 ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13,888	H21・22	10,990	H22	H25・26	行橋市55集 (本邦) 行橋市49集	H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17,636	H20・21	4,560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15,013	H20	10,547	H21	H23	行橋市45集	H21行橋市による調査
35	福岡	草場向名遺跡 因作二角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町因作	42,940	H20～22	3,420	H22・23	H24	6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町因作・田中・有久	29,491	H20～22	29,491	H21～23	H25・26	14・20集	H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1,110	H21					遺跡なし
38	福岡	菅見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町菅見	1,132	H21	1,132	H22	H25	10集	
39	福岡	菅見中園遺跡 菅見古墳	京都郡みやこ町菅見	8,218	H21・22	5,918	H21～23	H26	17集	H22菅見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町菅見・下原	45,510	H19～21	22,763	H20～22	H23・25・ 26	3・10・ 17集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町菅見	5,080	H21	3,580	H21・22	H25	10集	
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26,000	H21・22	26,000	H22	H26	20集	一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24,359	H21					遺跡なし

表1 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第3図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,833人（平成26年12月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、岨山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祇川をはじめ、小波瀬川、長峽川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

本書で報告する竹並下ノ原遺跡は京都平野のほぼ中央の中位段丘、標高15～19m前後に所在する。

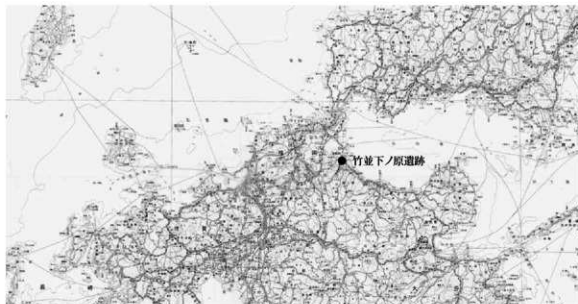
### 第2節 歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築築遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかった。

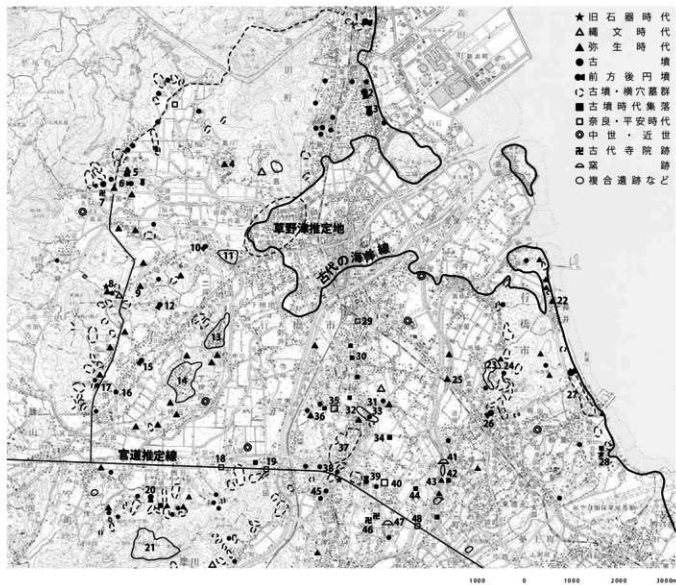
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、葦島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第4図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、早期の押型土器、後期の西平式系土器など各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が菊田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部



第3図 竹並下ノ原遺跡の位置(1/2,000,000)



- |             |             |             |             |              |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 石塚山古墳    | 2. 番塚古墳     | 3. 御所山古墳    | 4. 葛川遺跡     | 5. 黒浜メウト塚古墳  | 6. 徳永丸山古墳   |
| 7. 橋市廃寺     | 8. 入覚大原遺跡   | 9. 下崎丸山遺跡   | 10. ビツノクマ古墳 | 11. 延永ヤコミ園遺跡 | 12. 八雷古墳    |
| 13. 前田山遺跡   | 14. 下柳田遺跡   | 15. 庄屋塚古墳   | 16. 橋塚古墳    | 17. 鏡塚古墳     | 18. 大谷車籠遺跡  |
| 19. 天生田大池遺跡 | 20. 片峰1号墳   | 21. 御所ヶ谷神籠石 | 22. 長井遺跡    | 23. 代遺跡      | 24. 馬場代2号墳  |
| 25. 辻垣遺跡    | 26. 牟人塚古墳   | 27. 福童古墳群   | 28. 渡築紫遺跡   | 29. 崎野遺跡     | 30. 福富小畑遺跡  |
| 31. 侍塚遺跡    | 32. 竹並下ノ原遺跡 | 33. ヒメコ塚古墳  | 34. 曳熊遺跡    | 35. 福原長者原遺跡  | 36. 矢留堂ノ前遺跡 |
| 37. 竹並遺跡    | 38. 甲塚方墳    | 39. 惣社古墳    | 40. 豊前国府跡   | 41. 厨屋敷堂跡    | 42. 關先遺跡    |
| 43. 徳永川ノ上遺跡 | 44. 京ヶ辻遺跡   | 45. 彦徳甲塚古墳  | 46. 豊前国分寺跡  | 47. 徳政瓦葺跡    | 48. 磐見樋ノ口遺跡 |

第4図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも相付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廃寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。泉地区に所在する福原長者原遺跡は東西幅150mの区域をもつ8世紀前半の官衙遺跡で、奈良時代における豊前国府の可能性が指摘されている。

本書で報告する竹並下ノ原遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけて営まれた複合遺跡である。



## 第3章 竹並下ノ原遺跡

### 第1節 調査の概要

竹並下ノ原遺跡は、行橋市南泉2丁目691、同4丁目635ほかに所在する。標高15～19m前後の中位段丘に立地する。調査面積は10,990㎡(Ⅰ区:7,870㎡、Ⅱ区:3,120㎡)である。

調査の結果、縄文時代から江戸時代の遺跡を検出した。遺構には竪穴建物11軒をはじめとして、掘立柱建物4棟、土坑や溝、井戸、多数の柱穴などがあり、遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石鏃、石斧、石庖丁などがある。遺構検出面(地山)は橙色を呈し、砂礫を多く含んでいる。

### 第2節 Ⅰ区の調査

#### (1) 竪穴建物

##### SI001 (第6・7図、図版8・21)

調査区北側で確認した。北側から東側の一部が調査区外に伸びているが、検出できた範囲で南北壁長2.6m、東西壁長2.7mを測る。床面上では直径50～60cmで規則的に配置された4つの柱穴を確認した。このことから4本主柱穴をもつ一辺約3.0mの方形竪穴建物に復元できる。壁の立ち上がりは20cm程残っていた。壁際には幅20～30cm、深さ10cmの壁溝がめぐる。土師器、須恵器が出土した。

土師器 1は坏蓋。口縁部の小片である。

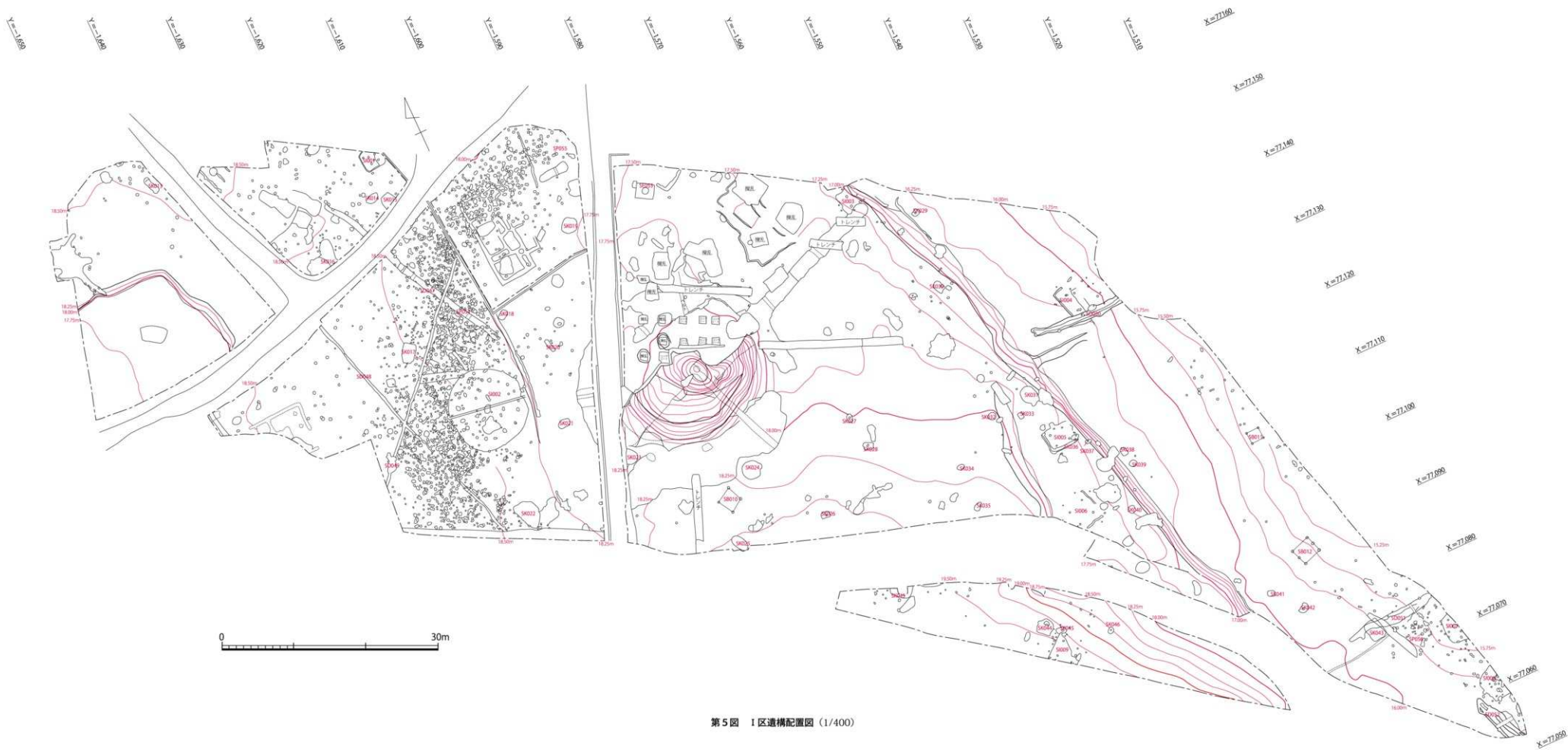
須恵器 2は坏蓋。天井部の小片。3・4は坏身。3は2分の1程度の破片で、復元口径11.4cm、器高4.3cm。4は口縁部の小片である。

##### SI002 (第8～10図、図版7・21・25)

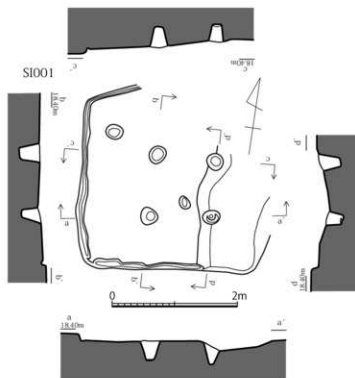
調査区の西側で検出した。直径11m前後を測る平面円形の大型竪穴建物である。床面上には主柱穴と考えられる直径約50cmの柱穴が20基程度放射状に配置される。中央には炉跡と考えられる直径80cm、深さ40cmの穴がある。壁の立ち上がりは20cm程残っていた。壁溝は無かった。床面からは弥生土器や石庖丁や石斧、台石などの石器が出土した。また建築部材と考えられる多くの炭化材を検出した。炭化材については別途第5章にて自然科学分析結果を報告するので参照されたい。

弥生土器 5～10は甕。5はほぼ完形で、口径25.4cm、底径7.2cm、器高26.5cm。口縁はゆるいくの字形をなす。底部は上げ底となる。6・7は口縁部から胴部下半の破片。6は復元口径33.6cm。口縁は如意形で口縁直下が胴部最大径となる。7は復元口径33.2cmを測る。くの字口縁で端部に刻目を施文する。頸部の下位に2条の沈線をめぐらし、胴部は中位が最大径となる。8は如意形の口縁部片。口縁直下には三角突帯を1条めぐらす。9・10は底部片。11～14は壺。11は底部を欠く破片。喇叭形にひらく口縁で、頸部には1条の三角突帯をめぐらす。胴部はやや扁球形を呈し、最大径となる中位にM字突帯、胴部上位にはへら描きによる連文をめぐらす。12は口縁部の小片。内面には山形文を貝殻で施文する。13は底部片。14は胴部下半から底部にかけての破片。甕の可能性もある。

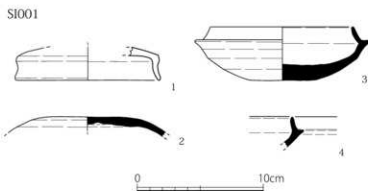
石器 117はスクレイパー。素材の形状をあまり変えず、側縁部の一部に調整を加えて刃部を作り出す。安山岩製。118・119は石庖丁。118は曲背外湾刃型の破片で、破断面に紐孔の一部を確認できる。凝灰質頁岩製。119は直刃型と考えられる小片。泥岩製。120は磨製石剣の基部片。石材は頁岩を用いる。121～123は太型始刃石斧。いずれも基部と刃部を欠く。表面の風化が著しい。安山岩質凝灰岩製。124は柱状片刃石斧。基部を欠く破片で砥石に転用した可能性がある。砂岩製。125は扁平両刃石斧。



第5図 I区遺構配置図 (1/400)



第6図 I区SI001実測図(1/60)



第7図 I区出土土器実測図1(1/3)

基部を欠く刃部片で砥石に転用したと考えられる。泥岩製。126は砥石の薄片。2面の砥面を残す。砂岩製。

#### SI003 (第11・12図、図版8・21)

調査区東側のやや東寄りで検出した。東側が削平を受け、南側がヒメコ塚古墳の墓道で削られる。現状で西壁長3.1m、北壁長1.4mを測る。床面上では主柱穴と思われる3つの柱穴を検出した。いずれも直径30cm、深さ30cm程度を測る。柱穴の配置と壁が直角に折れるコーナー持つことから、SI003は4本主柱穴をもつ一辺4m程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは30cm程残っていた。壁溝は無かった。出土遺物には土師器と須恵器がある。

土師器 15は甕。口縁部から胴部上半の破片。くの字形の口縁をなす。

須恵器 16～18は杯蓋。16は天井部片。17・18は口縁部の小片。

#### SI004 (第11・12・32図、図版8・21・26)

調査区の東側で検出した。東側が削平を受け、南側がSD050に削られる。現状で西壁長4.0m、北壁長3.6mを測る。床面上で複数の柱穴を検出した。南西側の柱の位置が若干ずれるが、4本主柱穴をもつ一辺5.5m程の方形の竪穴建物に復元できる。壁は残っていない。壁際には

は幅約20cm、深さ数cmの壁溝がめぐる。北側では焼土面を確認した。土師器と打製石鏃が出土した。

土師器 19は壺。胴部片で内面には輪積み痕跡を残す。20は埴。5分の4程度の破片で復元口径15.2cm、器高5.6cmを測る。21は高坏。坏部の底から脚部にかけての破片である。

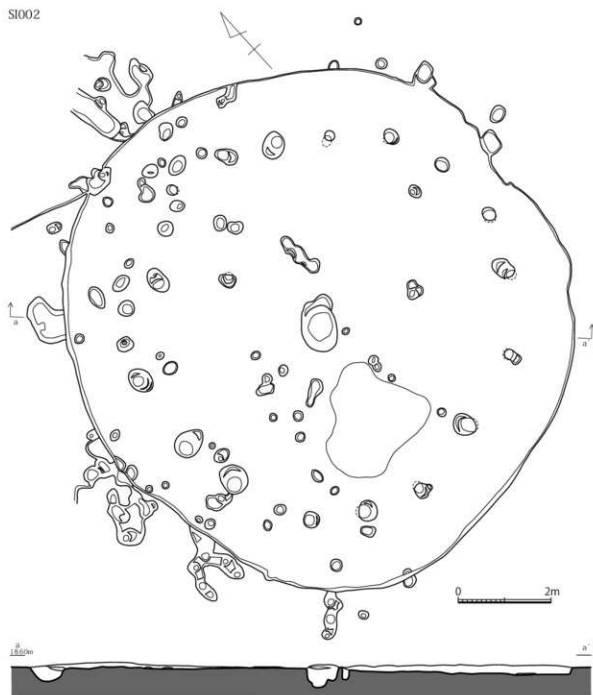
石器 127は打製石鏃。凹基式。わずかに先端を欠く。姫島産黒曜石製。

#### SI005 (第12・13図、図版9・21)

調査区中央の南寄りで検出した。北東側が削平を受けるが比較的良好に遺存する。南北壁長3.0m、東西壁長3.7mを測る。横長の方形の竪穴建物である。床面上には主柱穴と思われる4つの柱穴を検出した。いずれも直径約20～25cm、深さ約40cm。北壁の中央には造り付けのカマドがある。壁は10cm程残っており、西壁と南壁に沿って幅20～30cm、深さ10cmの壁溝がめぐる。土師器と須恵器が出土した。

土師器 22・23は甕。いずれも口縁部から胴部下半にかけての破片で、復元口径16.4cmを測る。同一個体の可能性がある。24は埴。3分の2程度を残す。口径15.85cm、器高7.6cm。全体的に肥厚する。

SI002



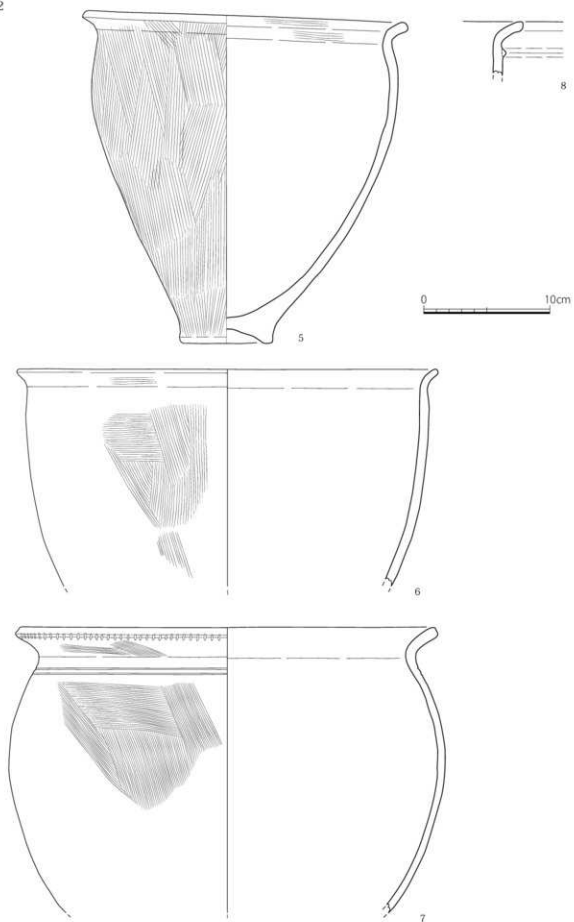
第8図 I区SI002実測図(1/80)

須恵器 25は坏身。口縁部から底部にかけての破片で、復元口径12.2cm、器高3.8cmを測る。

SI006(第13図、図版9)

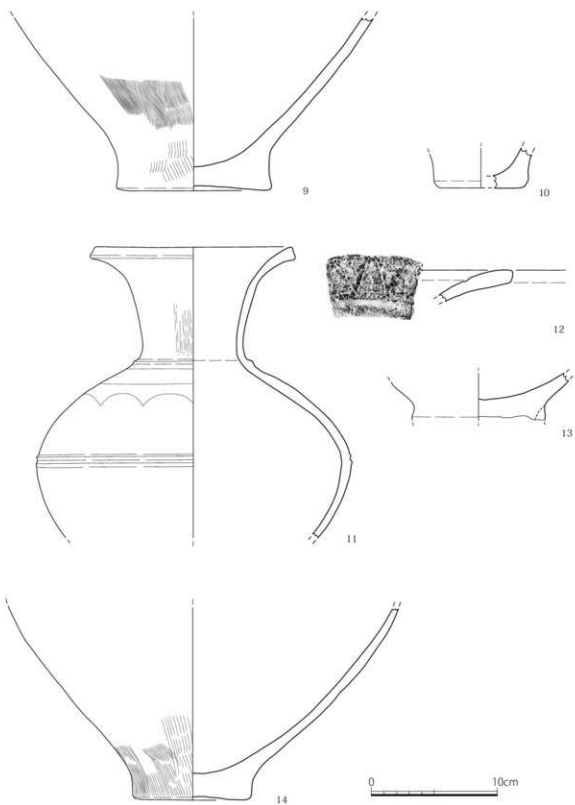
調査区の南寄りで検出した。北側から西側が削平を受けており、現状で東壁長2.5m、南壁長3.0mを測る。床面上で主柱穴と考えられる直径20cm前後、深さ20～40cmの規則的に配置される4つの柱穴を確認した。柱穴の配置と壁が直角に折れるコーナー持つことから、SI006は4本主柱穴をもつ一辺4.5m程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは残っていなかったが、壁際には幅15～25cm、深さ10cm程の壁溝がめぐる。北側の床には焼土面があり、本来は造り付けのカマドがあったと考えられる。なお出土遺物は無かった。

SI002

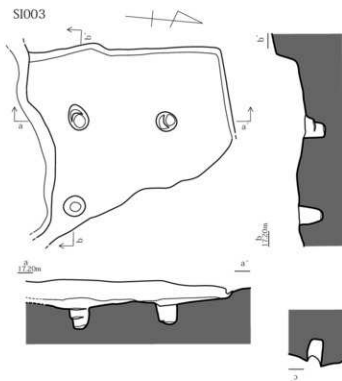


第9图 1区出土土器实测图2 (1/3)

S1002



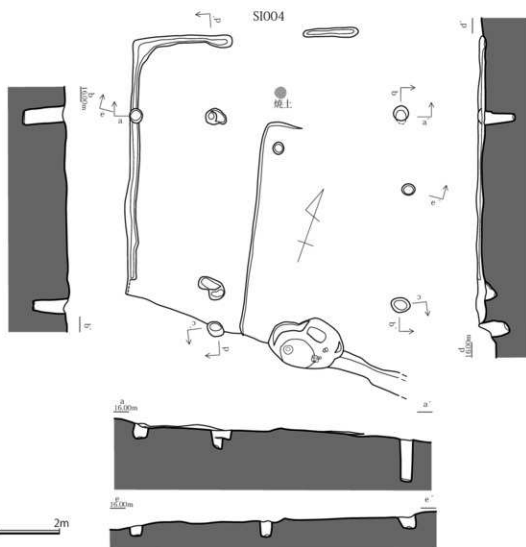
第10图 I区出土土器实测图3 (1/3)



SI007 (第14・15図、図版10・22)

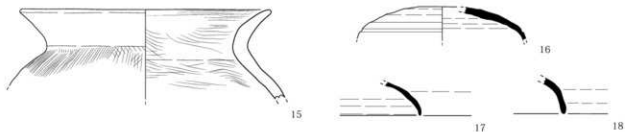
調査区の南側で検出した。全体の半分程が調査区外へと続き、検出できた範囲で周壁の長さは約6.5mを測る。床面上の中央には炬跡と考えられる直径60cm、深さ10cmの浅い土坑がある。そこから規則的に配置される3つの柱穴を主柱穴と考え、SI007は6本主柱穴をもつ直径4m程の円形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは約10cm残っていた。壁溝はめぐらない。弥生土器が出土した。

弥生土器 26は壺。肩部の小片で、外面

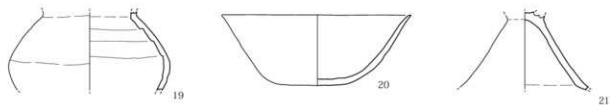


第11図 I区SI003・004実測図(1/60)

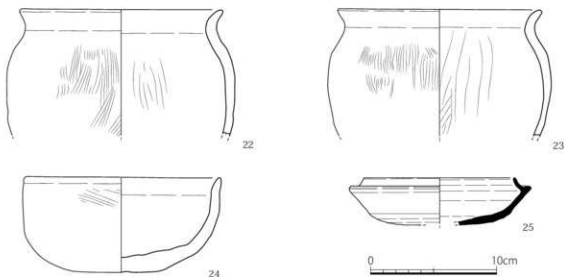
SI003



SI004



SI005



第12図 I区出土土器実測図4 (1/3)

には羽状文を貝殻で施文する

**SI008** (第14・15図、図版22)

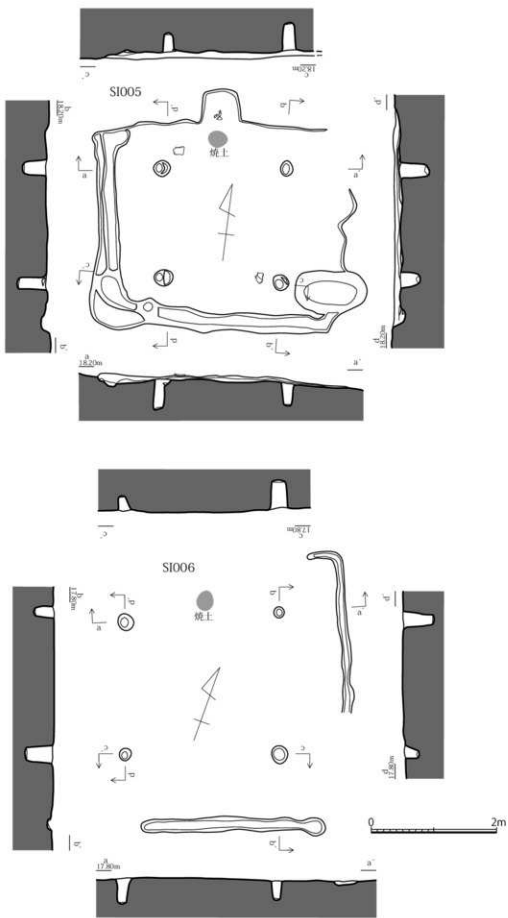
調査区の南側で検出した。SI007と同様に全体の半分が調査区外へと続いており、検出できた範囲で周壁の長さは約8.5mを測る。一辺4m程度の方形プランの竪穴建物になろうか。床面上で複数の柱穴を検出したが、主柱穴の配置は不明である。建物の壁の立ち上がりは10cm程が残っていた。壁溝はめぐらない。弥生土器が出土した。

**弥生土器** 27・29は甕。27は4分の3程度を残し、口径25.6cm、底径8.2cm、器高28.2cmを測る。口縁は如意形。胴部は砲弾形を呈し、その中位が最大径となる。29は底部片。28は壺。口縁部の小片。

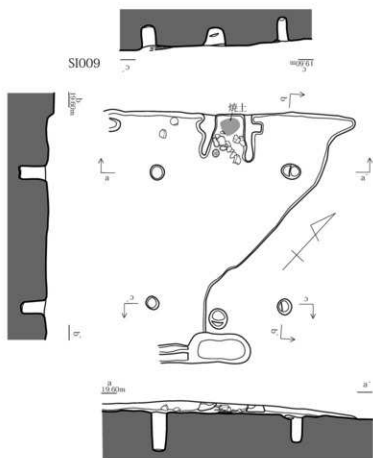
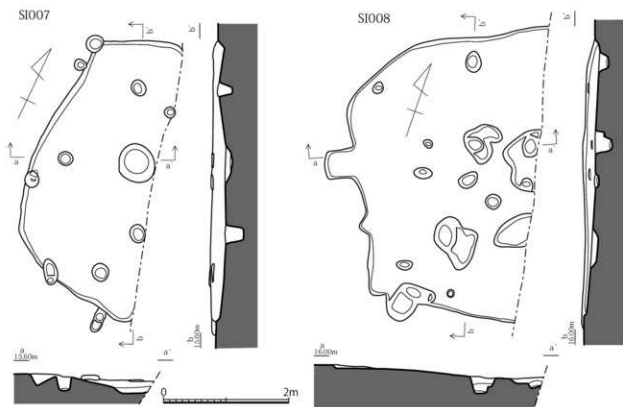
**SI009** (第14・15図、図版10・22)

調査区南側の西寄りで見出された。南西側が調査区外へと続いているが、おおよそ全体を把握する事がで





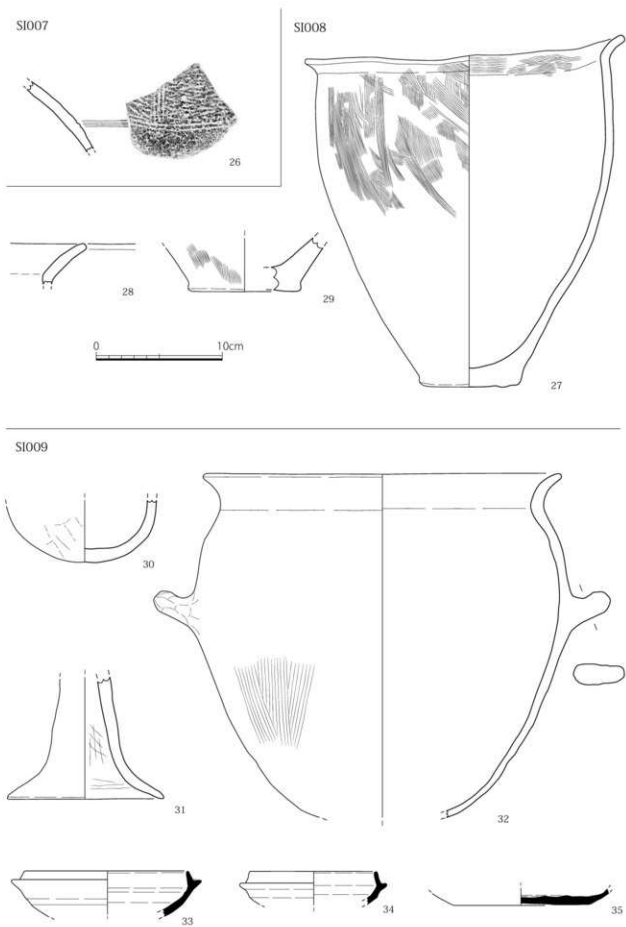
第 13 图 I 区 SI005 · 006 实测图 (1/60)



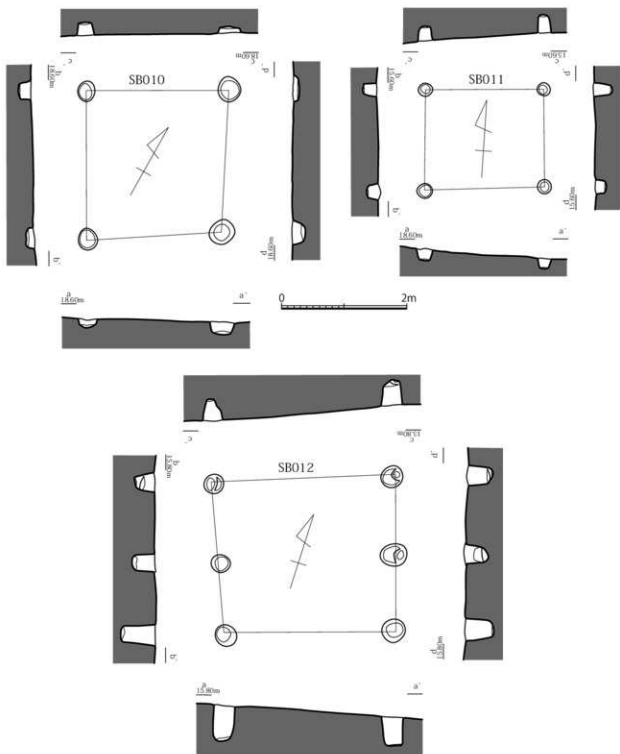
きる。直線をなす北壁は長さ4.0mを測る。床面上には主柱穴と考えられる規則的に配置された4つの柱穴がある。いずれも直径20cm、深さ50cm程である。このことよりSI009は4本主柱穴をもつ一辺4m程の方形プランの竪穴建物であったと考えられる。建物の壁の立ち上がりは10cm程度で一部の壁際には幅20cmの壁溝がめぐっている。北壁の中央では造り付けのカマドを検出した。両袖部が良好に遺存し、燃烧部では焼土面を検出した。出土遺物には土師器、須恵器がある。

土師器 いずれもカマドの燃烧部より出土した。30は壺。底部の小片である。31は高環の脚部片。32は甕。2分の1程度を残し、復元口径28.6cmを測る。口縁はやや外反するくの字形をなし、丸みを帯びた

第14図 I区SI007・008・009実測図(1/60)



第15图 I区出土土器实测图5 (1/3)



第16図 I区 SB010・011・012 実測図 (1/60)

胴部の中位にはやや平たい把手が付く。

須恵器 33・34 は坏身。いずれも口縁部の小片である。35 は皿か。底部片で復元底径 11.0cm を測る。

(2) 掘立柱建物

SB010 (第16図、図版11)

調査区の中央やや南寄りで見出した。1間×1間の掘立柱建物である。西側の柱列では方位をN-30°

—Wにとる。柱間は東側で2.25m、西側で2.4m、南側で2.15m、北側で2.25mを測り、正方形に近い平面プランとなる。柱穴は直径30～40cm、深さ10～20cmを測る。出土遺物は無かった。

#### SB011 (第16図、図版11)

調査区の南寄りで検出した。1間×1間の掘立柱建物である。東側と西側の柱列では方位をN-3°-Wにとる。柱間は東側と西側で1.55m、南側と北側で1.9mを測り、東西に長い整った長方形プランとなる。柱穴は直径20～25cm、深さ15～30cmを測る。出土遺物は無かった。

#### SB012 (第16図)

調査区の南側で検出した。西側の柱列では方位をN-22°-Wにとる。桁行は南側で2.75m、北側で2.95mを測る。梁行は東側で2.5m、西側で2.4mで、柱間は東側で1.2～1.3m、西側で1.15～1.25mを測る。東西に長いやや歪んだ長方形プランとなる。柱穴は直径30～40cm、深さ35～55cmを測る。出土遺物は無かった。

### (3) 土坑

調査区では多くの土坑を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に主要なものだけを報告する。

#### SK013 (第17・18図、図版11・22)

調査区北西側で検出した。やや歪んだ長方形を呈し、長軸255cm、短軸85cm、深さ30cmを測る。弥生土器と須恵器が出土した。

弥生土器 36は壺。底部の小片。

須恵器 37は壺か。肩部の破片である。

#### SK014 (第17・18・32図、図版22・26)

調査区北側の西寄り検出した。SK015と接する。歪んだ楕円形を呈し、長軸190cm、短軸105cm、深さ15cmを測る。弥生土器と砥石が出土した。

弥生土器 38は甕。口縁部から胴部下半にかけての破片である。口縁は如意形で砲弾形の胴部となる。口縁直下に1条の沈線をめぐらす。復元口径23.2cm。

石器 128は砥石。小片で1面の砥面を残す。玄武岩製。

#### SK015 (第17・18図、図版22)

調査区北側の西寄り検出した。SK014と接する。南側が調査区外に続いているが、検出できた範囲で長軸200cm、短軸135cm、深さ45cmを測る。弥生土器が出土した。

弥生土器 39は甕。底部の小片。40は壺。口縁部の小片で、頸部には1条の赤帯をめぐらす。

#### SK016 (第17・18図、図版12・22)

調査区北側の西寄り検出した。南側が調査区外に続くが、検出できた範囲で長軸430cm、短軸380cm、深さ45cmを測る大型の土坑である。弥生土器が出土した。

弥生土器 41・42は甕。41は胴部下半から底部にかけての破片。42は小型品の口縁部片である。

#### SK017 (第17図、図版12)

調査区西側で検出した。長方形を呈し、長軸290cm、短軸200cm、深さ50cmを測る。出土遺物は無い。

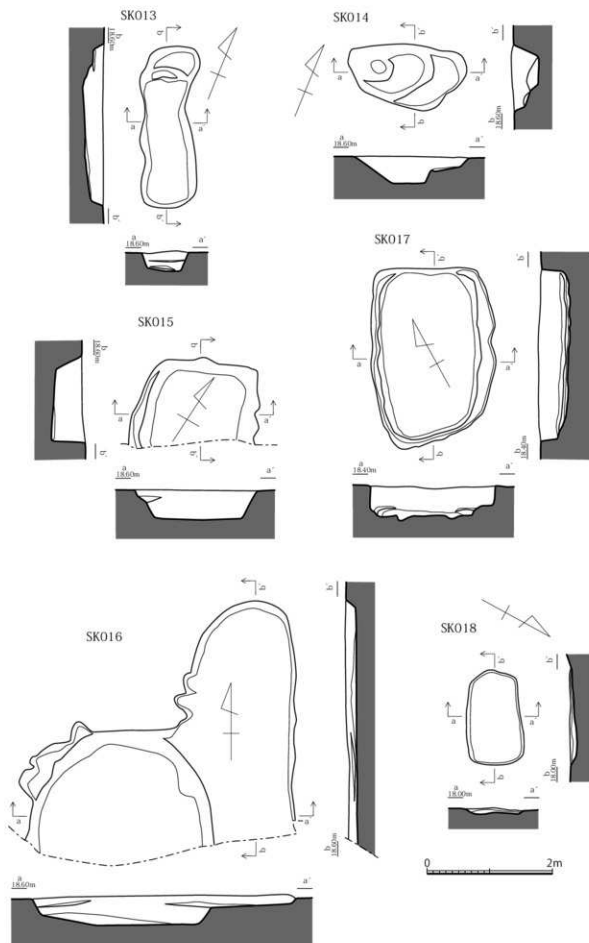
#### SK018 (第17図)

調査区の北寄り検出した。長方形を呈し、長軸150cm、短軸85cm、深さ10cmを測る。出土遺物は無い。

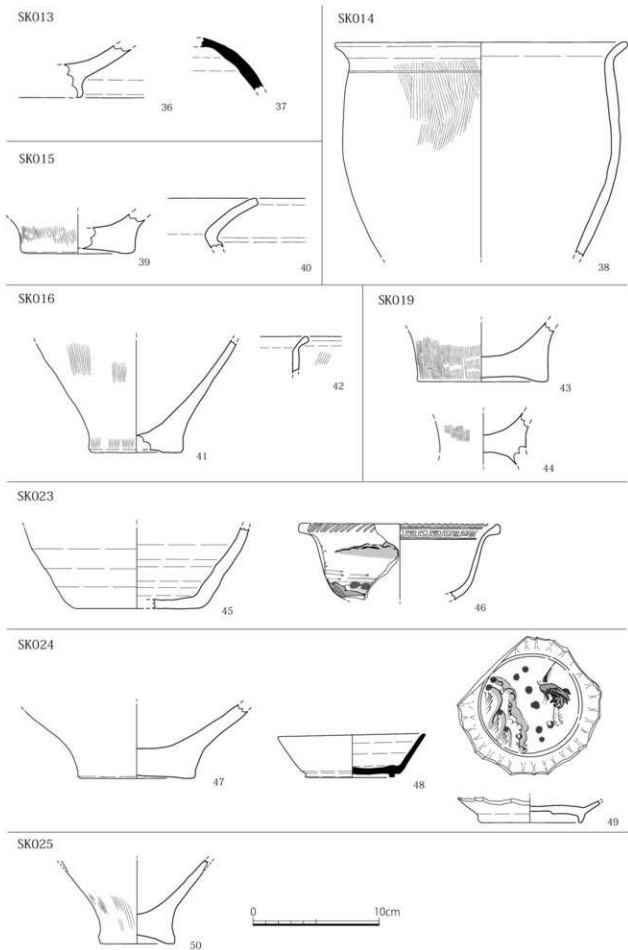
#### SK019 (第18・19図、図版22)

調査区北側で検出した。円形土坑で直径200cm程度、深さ80cmを測る。弥生土器が出土した。

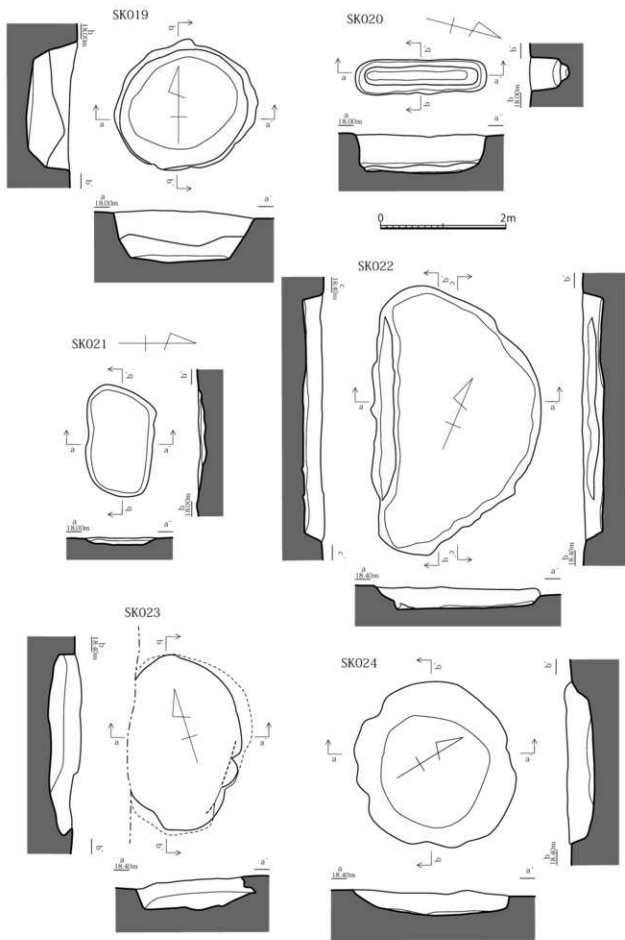
弥生土器 43は甕。底部片。44は甕か。上げ底となる底部片である。



第 17 图 I 区 SK013 · 014 · 015 · 016 · 017 · 018 实测图 (1/60)



第18图 1区出土土器实例图6 (1/3)



第 19 图 I 区 SK019 · 020 · 021 · 022 · 023 · 024 实测图 (1/60)



**SK020** (第 19 図、図版 12)

調査区中央の西寄りで検出した。細長い隅丸長方形を呈し、底は二段掘りされている。長軸 210cm、短軸 55cm、深さ 60cm を測る。出土遺物は無かった。

**SK021** (第 19 図)

調査区中央の西寄りで検出した。隅丸長方形で長軸 175cm、短軸 105cm、深さ 10cm を測る。出土遺物は無い。

**SK022** (第 19・32 図、図版 13・26)

調査区中央の西側で検出した。歪んだ楕円形を呈し、長軸 425cm、短軸 270cm、深さ 30cm を測る。打製石鏃と凹石が出土した。

石器 129 は打製石鏃。平基式。先端と片脚を欠く。安山岩製。130 は凹石。ほぼ完形である。凝灰岩製。

**SK023** (第 18・19 図、図版 13・22)

調査区中央のヒメコ塚古墳の脇で検出した。西側が調査区外へと続いている。楕円形を呈し、現状で長軸 280cm、短軸 180cm、深さ 50cm を測る。陶器、染付が出土した。

陶器 45 は甕。小型品の底部片と考えられる。

染付 46 は鉢。外面に岩、口縁部内面に雷文を絵付けする。口縁部には刻目を施す。復元口径 15.4cm を測る。

**SK024** (第 18・19・32 図、図版 13・22・26)

調査区中央のヒメコ塚古墳の脇で検出した。やや歪んだ円形を呈した土坑で、直径約 260cm、深さ 40cm を測る。弥生土器、須恵器、染付、打製石鏃が出土した。

弥生土器 47 は壺。底部の小片である。

須恵器 48 は埴。ほぼ完形で、復元口径 11.85cm、復元底径 7.2cm、器高 3.5cm を測る。

染付 49 は皿。ロクロナデ成形後に花形文を型打ちする。見込みに鷲を絵付けする。蛇目凹形高台。

石器 131 は打製石鏃。基部を欠く先端部の破片。安山岩製。

**SK025** (第 18・20 図、図版 22)

調査区中央の西側で検出した。楕円形で長軸 250cm、短軸 140cm、深さ 20cm。弥生土器が出土した。弥生土器 50 は甕。胴部下半から底部にかけての小片である。

**SK026** (第 20・33 図、図版 14・26)

調査区中央のやや西寄りに位置する。長辺 125cm、短辺 75cm の長方形プランを呈し、底に直径 20cm、深さ 25cm の柱穴を有する。出土遺物には砥石がある。

砥石 132 は砥石。上下を欠く小片である。2面の砥面を残す。石材には層灰岩を用いる。

**SK027** (第 20・33 図、図版 14・26)

調査区中央やや南寄りで検出した。楕円形を呈し、長軸 120cm、短軸 70cm、深さ 30cm を測る。底に直径 25cm、深さ 60cm の柱穴を有する。打製石鏃が出土した。

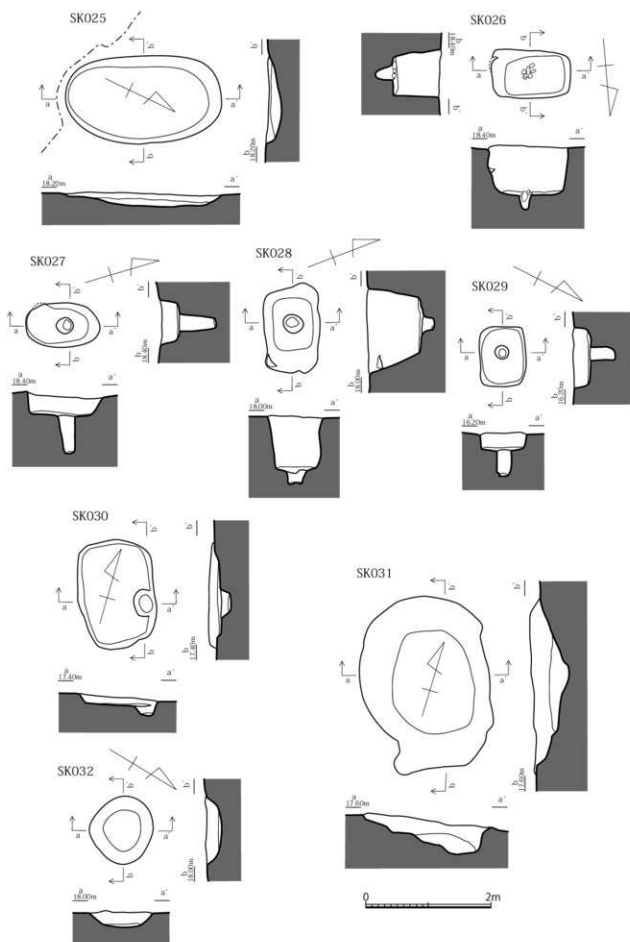
石器 133 は打製石鏃。平基式。ほぼ完形である。安山岩製。

**SK028** (第 20 図、図版 15)

調査区中央のやや南寄りに位置する。長辺 140cm、短辺 85cm の長方形を呈し、底に直径 30cm、深さ 20cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

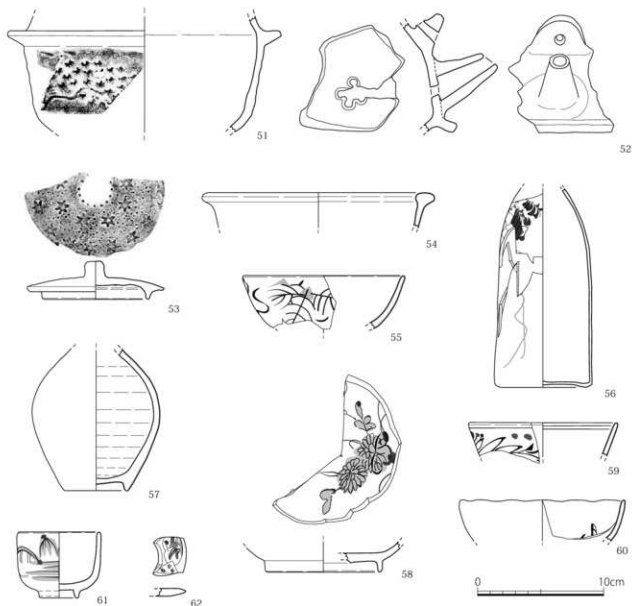
**SK029** (第 20 図、図版 15)

調査区中央の東側で検出した。長方形を呈し、長辺 95cm、短辺 70cm、深さ 30cm を測る。底には直



第20图 I区SK025·026·027·028·029·030·031·032实测图(1/60)

SK031



第21図 I区出土土器実測図7 (1/3)

径20cm、深さ40cmの柱穴を有する。出土遺物は無かった。

**SK030** (第20・33図、図版15・26)

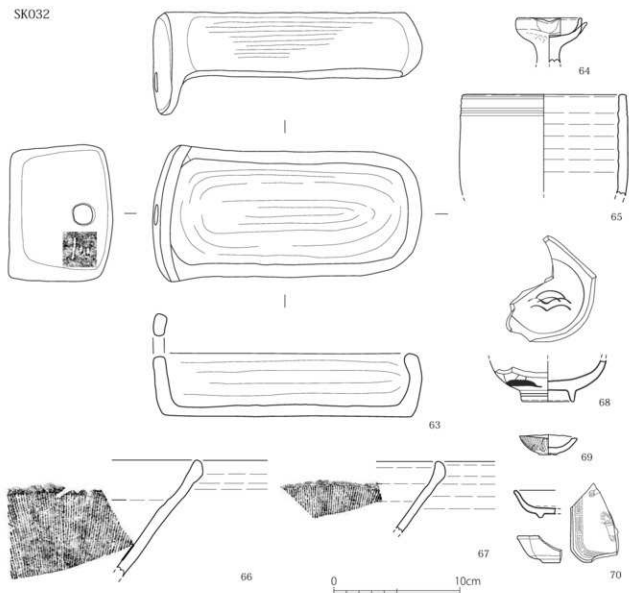
調査区中央のやや東寄りで検出した。隅丸方形を呈し、長軸170cm、短軸120cm、深さ15cmを測る。出土遺物には磨製石斧がある。

石器 134は磨製石斧。基部片で刃部を欠く。凝灰質砂岩製。

**SK031** (第20・21図、図版16・23)

調査区中央の南寄りで検出した。歪な楕円形を呈し、長軸270cm、短軸205cm、深さ45cmを測る。瓦質土器や陶器、磁器など近世の遺物が出土した。

瓦質土器 51は釜か。蓋の可能性もある。外面は型押しによって松の文様を施す。52は水注。注口部の破片である。53は釜蓋。2分の1程度の破片である。外面は型押しによって星形文を施す。



第22図 I区出土土器実測図8 (1/3)

陶器 54は鉢。口縁部片で鉄軸を施軸する。55は陶胎染付の碗。56は瓶。関西系の施軸陶器である。

白磁 57は瓶。胴部上半から底部にかけての破片で、全体の2分の1程度を残す。

染付 58は皿。見込みに菊唐草文を絵付けする。蛇目凹形高台。59・60は碗。いずれも口縁部片で、60は波状口縁となる。61は猪口。外面には橋や舟ののった人物が絵付けされる。62は不明品の小片。

SK032 (第20・22・33図、図版16・23・26)

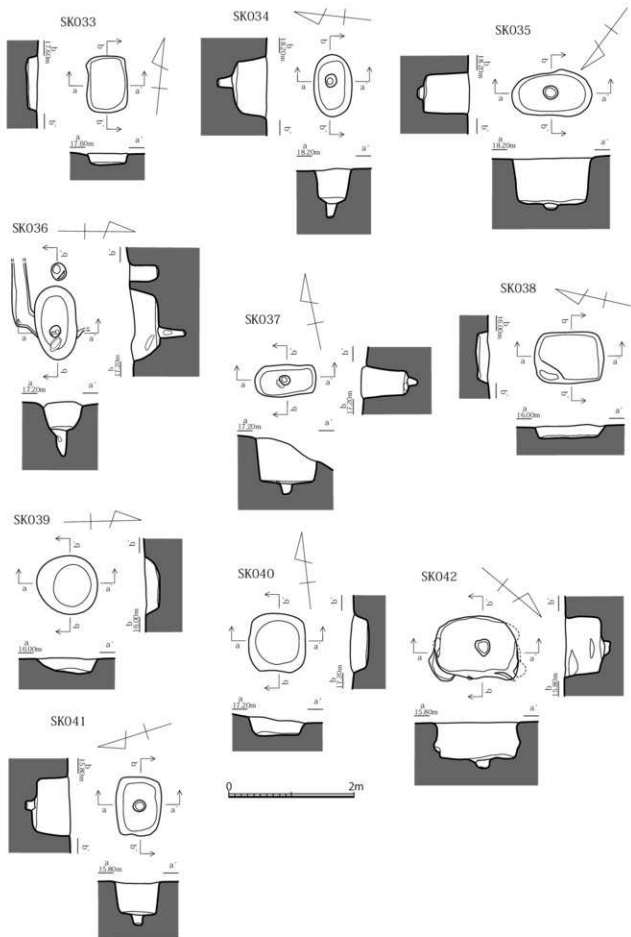
調査区中央の南寄りで検出した。直径100cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。近世の遺物が出土した。

瓦質土器 63は火舎か。完形で箱状をなす。正面には1cm大の穿孔があり、「三」と線刻されている。

陶器 64は乗燭。坏部を欠損する。唐津系。65は水指。口縁部片で復元口径13.2cm。鉄軸を施す。66・67は播鉢。いずれも口縁部の破片。内面に播目を施文し、鉄軸を施す。上野・高取系。

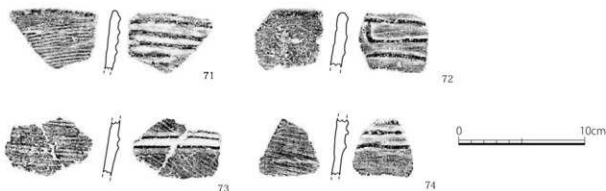
染付 68は碗。見込みに青海波文、外面に草花文?を絵付けする。

白磁 69は紅皿。完形品である。型押し成形し施軸する。70は角皿の小片。糸切り細工成形を行い、内面を白土で施文し透明軸を施軸する。

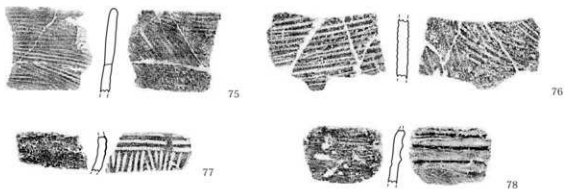


第 23 图 I 区 SK033 · 034 · 035 · 036 · 037 · 038 · 039 · 040 · 041 · 042 实测图 (1/60)

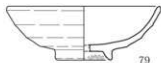
SK036



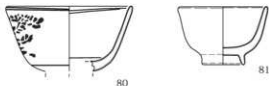
SK037



SK039



SK040



第 24 図 1 区出土土器実測図 9 (1/3)

石器 135 は砥石。完形で長さ 9.4cm、幅 3.6cm、厚さ 2.0cm を測る。4 面の砥面を残す。凝灰岩製。

SK033 (第 23 図、図版 16)

調査区中央の南寄りで見出した。隅丸方形で長辺 90cm、短辺 65cm、深さ 20cm を測る。出土遺物は無い。

SK034 (第 23 図、図版 17)

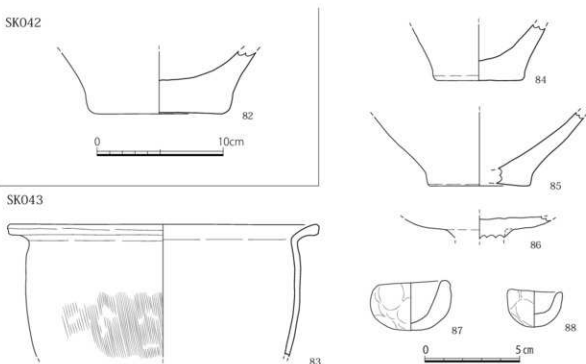
調査区中央の南寄りで見出した。楕円形を呈し、長軸 100cm、短軸 60cm、深さ 55cm を測る。底には直径 20cm、深さ 20cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

SK035 (第 23 図、図版 17)

調査区中央の南寄りで見出した。楕円形を呈し、長軸 125cm、短軸 70cm、深さ 70cm を測り、底には直径 20cm、深さ 10cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

SK036 (第 23・24 図、図版 17・18・23)

調査区中央の南寄りで見出した。SI005 と重複する。楕円形を呈し、長軸 115cm、短軸 65cm、深さ



第25図 I区出土土器実測図10 (1/3・1/2)

45cmを測る。底面に直径15cm、深さ40cmの柱穴を有する。縄文土器が出土した。

縄文土器 71～74は深鉢。71・72は口縁部片で他は胴部の小片。いずれも前期の轟B式系統である。

SK037 (第23・24・33、図版18・23・26)

調査区中央の南寄りで検出した。SK036と近接する。隅丸方形を呈し、長辺95cm、短辺50cm、深さ75cmを測る。底には直径15cm、深さ15cmの柱穴を有する。縄文土器、スクレイパーが出土した。

縄文土器 75～78は深鉢。75は条痕文を有する口縁部片。76は同様の胴部片。77は胎土に滑石が混ざる曾畑式系統の胴部片である。78は外面に隆起文をもつ轟B式系統の胴部片である。

石器 136はスクレイパー。比較的大型で素材の形状をあまり変えず、側縁部の一部に調整を加えて刃部を作り出す。安山岩製。

SK038 (第23図、図版18)

調査区の南寄りで検出した。SK039と近接する。方形を呈し、長辺110cm、短辺80cm、深さ20cmを測る。出土遺物は無かった。

SK039 (第23・24図、図版23)

調査区の南寄りで検出した。SK038と近接する。円形で直径90cm程、深さ20cmを測る。白磁が出土した。

白磁 79は小皿。2分の1程の破片。復元口径12.2cm、器高4.3cmを測る。見込みは蛇目軸刺ぎをする。

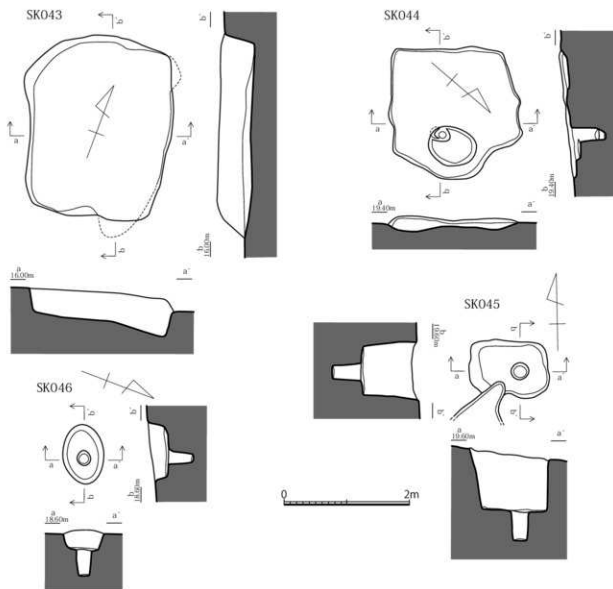
SK040 (第23・24・33図、図版19・23・26)

調査区の南寄りで検出した。隅丸方形を呈し、一辺90cm、深さ30cmを測る。磁器と砥石が出土した。

染付 80は小鉢。口縁部片で復元口径10.2cmを測る。外面に型紙摺りによって草花文を表す。

白磁 81は猪口。3分の1程の破片で、復元口径7.0cm、器高4.6cmを測る。

石器 137は砥石。小片で1面の砥面を残す。凝灰岩製。



第26図 I区 SK043・044・045・046実測図 (1/60)

**SK041 (第23図)**

調査区の南側で検出した。隅丸方形を呈し、長軸90cm、短軸70cm、深さ50cmを測る。底面に直径20cm、深さ15cmの柱穴を有する。出土遺物は無かった。

**SK042 (第23・25図、図版24)**

調査区の南側で検出した。やや歪な楕円形を呈し、長軸130cm、短軸100cm、深さ55cmを測る。底には直径20cm、深さ10cmの柱穴を有する。弥生土器が出土した。

弥生土器 82は甕。底部片である。

**SK043 (第25・26図、図版24)**

調査区の南側で検出した。SD051を切る。歪な隅丸長方形を呈し、長辺285cm、短辺240cm、深さ50cmを測る。弥生土器、土師器が出土した。

弥生土器 83・84は甕。83は口縁部から胴部中位にかけての破片で、復元口径24.8cmを測る。口縁は鋤形に近いくの字形をなし、胴部は砲弾形となる。84は底部の小片。85は壺か。底部片である。



土師器 86 は高坏。坏部の底部片である。87・88 は手捏土器。いずれも椀形を呈し、87 は口径 3.7cm、器高 2.6cm、88 は口径 2.9cm、器高 1.95cm を測る。

SK044 (第 26・33 図、図版 19・26)

調査区南側のやや西寄りに位置する。SK045 に接する。歪な方形を呈し、一辺 200cm 程、深さ 20cm 程を測る。底面の北側に直径 20cm、深さ 50cm の柱穴を有する。打製石鏃が出土した。

石器 138 は打製石鏃。尖基式で完形。石材に安山岩を用いる。

SK045 (第 26 図、図版 19)

調査区南側のやや西寄りに位置する。SK044 に近接し、SI009 に切られる。隅丸長方形を呈し、長辺 125cm、短辺 90cm、深さ 90cm を測り、底面に直径 25cm、深さ 40cm の柱穴を有する。出土遺物は無い。

SK046 (第 26 図、図版 20)

調査区南側のやや西寄りに位置する。楕円形を呈し、長軸 95cm、短軸 65cm、深さ 30cm を測る。底面に直径 20cm、深さ 40cm の柱穴を有する。出土遺物は無かった。

#### (4) 溝

調査区では複数の溝を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に主要なものだけを報告する。

SD047 (第 5 図、図版 2)

調査区の北側で検出した。SD049 に切られる。南北方向に伸びており、検出できた範囲で長さ 30.5m、最大幅 1m を測る。出土遺物は無かった。

SD048 (第 5 図、図版 2)

調査区の北側で検出した。SD049 と切り合うが前後関係は不明である。南北方向に伸び調査区外へと続いている。途中途切れるが検出できた範囲で長さ 38.5m、最大幅 40cm を測る。出土遺物は無かった。

SD049 (第 5 図、図版 2)

調査区の北側で検出した。SD047 を切る。SD048 との前後関係は不明である。北東から南西方向に伸び、調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 33m、最大幅 50cm を測る。出土遺物は無かった。

SD050 (第 5 図、図版 4・20)

調査区の東側で検出した。SI004 を切る。東西方向に伸びており、東側は調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 13m、最大幅 1.6m を測る。出土遺物は無い。

SD051 (第 5・27・33 図、図版 5・24・26)

調査区の南側で検出した。SK043 に切られる。東西方向に伸びている。検出できた範囲で長さ 13m、最大幅 1.7m を測る。弥生土器、土師器、須恵器、打製石斧、磨製石斧が出土した。

弥生土器 89～93 は甕。89 は如意形の口縁部片で、端部に刻目を施文する。90・92・93 は底部片。91 は頸部片で壺の可能性もある。大型の M 字突帯を 1 条めぐらす。

土師器 94・95 は高坏。94 は坏部片。端部を欠く。95 は脚部片。96・97 は手捏土器。いずれも椀形を呈す。96 は完形で口径 3.4cm、器高 1.7cm を測る。97 は口縁部を欠損する。

須恵器 98 は壺。底部片か。

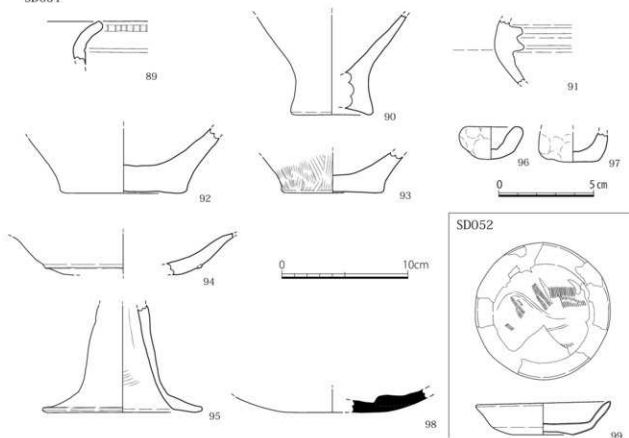
石器 139 は扁平打製石斧。刃部を欠く。緑泥片岩製。140 は磨製石斧。基部を欠く。緑泥片岩製。

SD052 (第 5・27 図、図版 24)

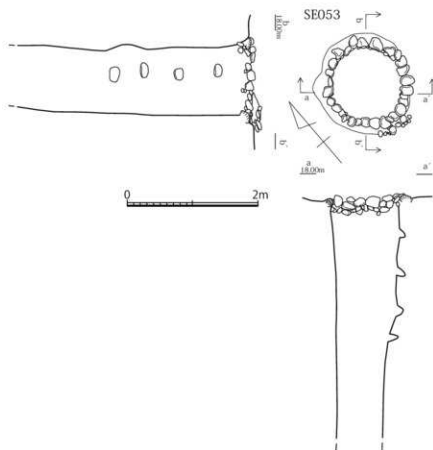
調査区の南側で検出した。南北に伸び、南側は調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ 8m、最大幅 2.8m を測る。青磁が出土した。

青磁 99 は皿。5 分の 4 程度を残し、口径 10.8cm、底径 4.6cm、器高 2.65cm を測る。同安窯系の製品。

SD051



第27図 I区出土土器実測図11 (1/3・1/2)



第28図 I区 SE053実測図 (1/60)

## (5) 井戸

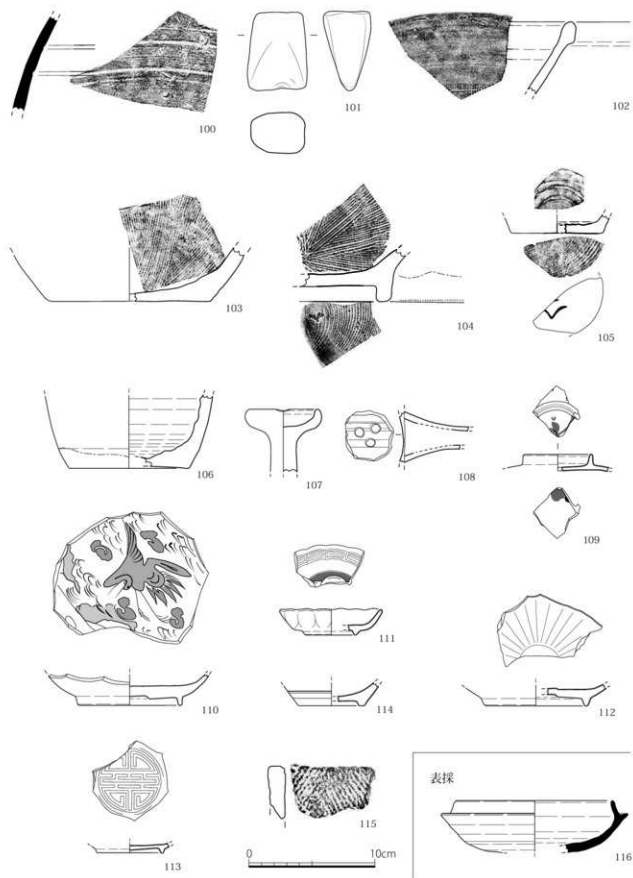
## SE053 (第28・29図、図版20・24)

調査区中央の北寄りに位置する。直径約1mの円形を呈す。3.6mの深さまで掘り下げたが完掘にはいたらなかった。上部には拳大の川原石をめぐらせる。壁面には足掛けの挟りがある。近世の遺物が出土した。

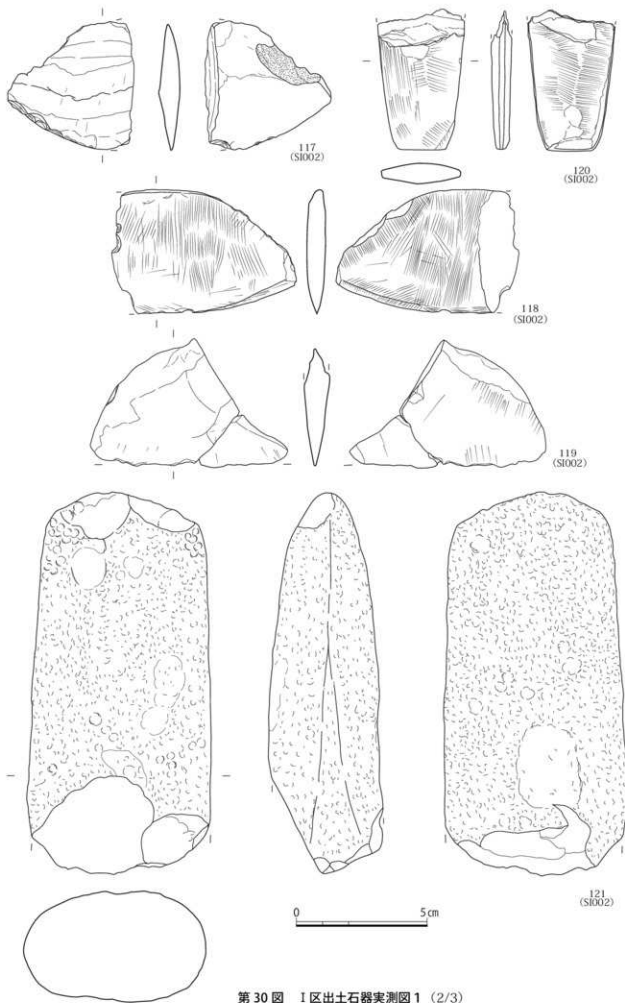
**須恵器** 100は甕。口縁部の破片で端部を欠く。外面には波状文を模倣する。

**土製品** 101は楔形不明品。

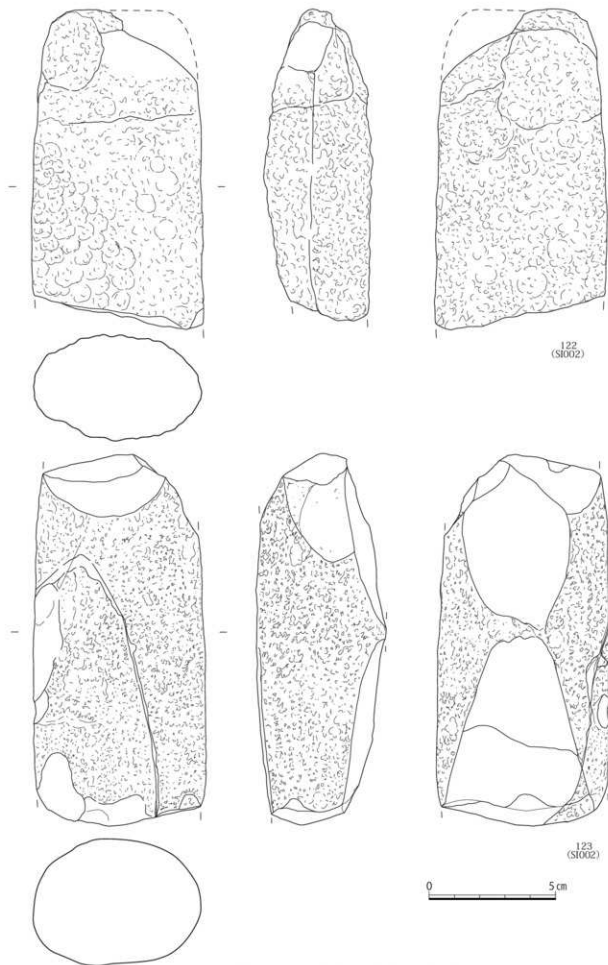
**陶器** 102～103は播鉢。102は口縁部片。103・104は底部片で104は高台が付く。内面に播目を施文し、鉄軸を施す。上野・高取系。105・106は壺の底部片。105は外面に



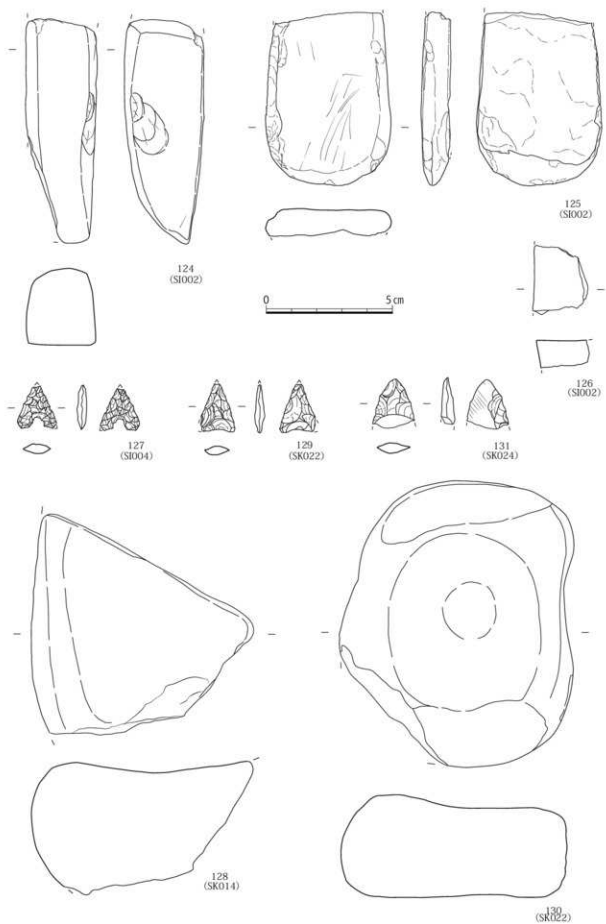
第29图 I区出土土器实测图12(1/3)



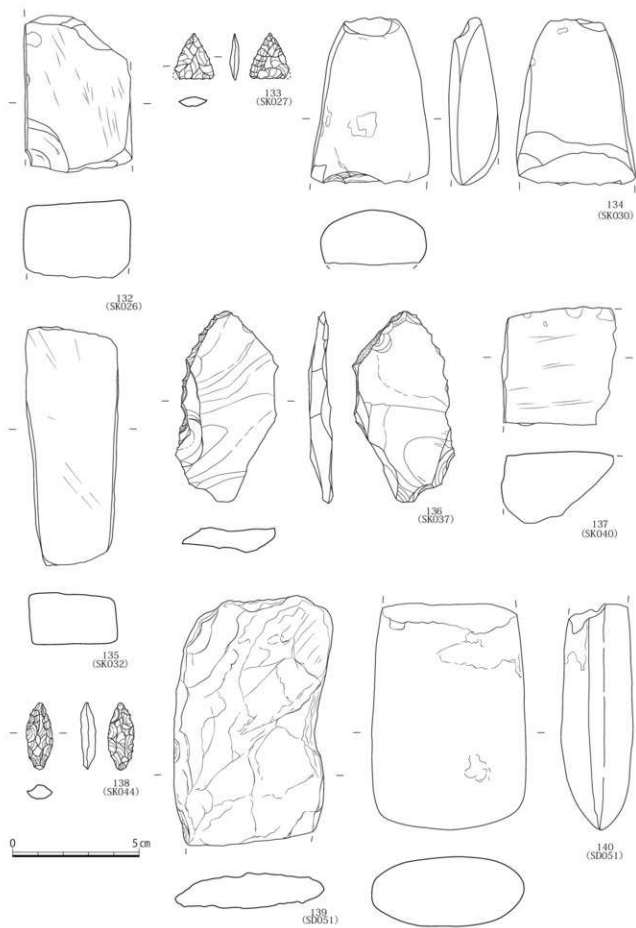
第30图 I区出土石器实测图1 (2/3)



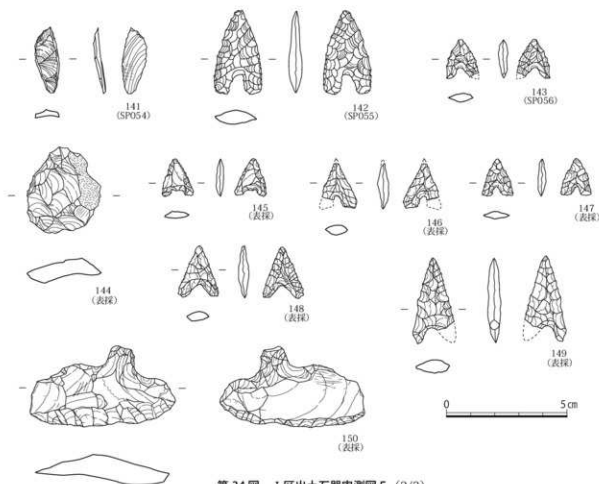
第 31 图 I 区出土石器实例图 2 (2/3)



第 32 图 I 区出土石器实测图 3 (2/3)



第 33 图 I 区出土石器实测图 4 (2/3)



第34図 Ⅰ区出土石器実測図5 (2/3)

白化粧土を施し、底部外面に墨書を有す。107は乗燭。環部を欠損する。唐津系。108は水注。注口部片。

色絵 109は碗蓋。摘部の小片で、染付に赤の色絵具で絵付けする。

染付 110・111。110は口縁部を欠く。見込みに鶴波文を絵付けする。蛇目凹形高台。111は5分の1程度の破片。花形に型打ち成形し、内面をゴスや白土で絵付けする。

白磁 112・113。いずれも底部片。112は菊花形に型打ち成形する。蛇目凹形高台。113は見込みに寿字文を線彫りする。

青磁 114は碗。底部の小片である。

瓦 115は平瓦か。小片で凸面には縄目タタキ痕を有する。

#### (6) 柱穴 (第5・34図、図版26)

調査区では多くの柱穴を検出した。柱穴出土の石器のうち主要なものだけを以下に報告する。

石器 141はナイフ形石器。漆黒色を呈す黒曜石製。SP054出土。142・143は打製石鏃。142は完形の大型品。凹基式。SP055出土。143は片脚を欠く。凹基式。SP056出土。いずれも姫島産黒曜石製。

#### (7) 採集遺物 (第29・34図、図版24・26)

須恵器 116は坏身。3分の1程の破片で、復元口径15.0cmを測る。

石器 144はスクレイパー。剥離調整はあまり行わない。姫島産黒曜石製。145～149は打製石鏃。145は完形。凹基式。安山岩製。146は片脚を欠く。凹基式。姫島産黒曜石製。147は完形。凹基式。姫島山黒曜石製。148は完形。凹基式。姫島産黒曜石製。149は大型品。片脚を欠く。凹基式。片岩製か。150は石匙。完形。比較的整った形状である。姫島産黒曜石製。



番号	出土遺物	種別	用途	部量(mm)	説明	発見	出土	出所	形状	備考
1	51001	土師器	杯	底径13.4 残高2.4	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→2.5mmの線跡を 少量含む	内:径10.5φ 外:径12.0φ	口縁部片	
2	51002	煮炊器	杯	残高1.6	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→2.5mmの線跡を 含む	内:径13.5φ	天井部片	
3	51003	煮炊器	杯	底径13.4 高4.2	内:同径ナガ 外:同径ナガ	やや不具	鉄線→1mmの白色線 跡を含む	内:径7.0φ 外:径10.0φ	1/2程度	ハラ留りも認め る
4	51004	煮炊器	杯	残高2.5	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	特良	内:径13φ	口縁部片	
5	51005	煮生土器	皿	径25.4 底径7.2 高26.5	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→1mmの線跡を 含む	内:径7.0φ	口縁部片	ほぼ空所
6	51006	煮生土器	皿	底径13.6 残高17.3	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの中継を 含む	内:径10φ	口縁部片	口縁部→銅 線片
7	51007	煮生土器	皿	底径13.2 残高21.7	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの線跡を 少量含む	内:径10φ	口縁部片	口縁部→銅 線片
8	51008	煮生土器	皿	残高4.25	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの白色中 継を多く含む	内:径10φ	口縁部片	
9	51009	煮生土器	皿	底径12.4 残高1.9	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの白色中 継を含む	内:径10φ	口縁部片	銅線→底 部片
10	51010	煮生土器	皿	底径15.7φ 残高1.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→2.5mmの白 色線跡を少量含む	内:径11φ	口縁部片	底面片
11	51011	煮生土器	皿	底径13.8 残高2.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの白色線 跡を多く含む	内:径10φ	口縁部片	口縁部→銅 線片
12	51012	煮生土器	皿	残高2.5	内:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの白色線 跡を多く含む	内:径7.0φ	口縁部片	
13	51013	煮生土器	皿	残高1.8	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→1mmの中継を 多く含む	内:径2.0φ	口縁部片	底面片
14	51014	煮生土器	皿	底径4.2 残高15.4	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→1mmの白色中 継を多く含む	内:径10φ	口縁部片	銅線→底 部片
15	51015	土師器	皿	径26.2 残高7.1	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→1mmの白色 線跡・金線跡を含む	内:径7.0φ	口縁部片	口縁部→銅 線片
16	51016	煮炊器	杯	残高2.75	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→1mmの白色線 跡を含む	内:径7.0φ	天井部片	
17	51017	煮炊器	杯	残高2.7	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→1mmの白色線 跡を含む	内:径13φ	口縁部片	
18	51018	煮炊器	杯	残高2.9	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→2mmの白色線 跡を含む	内:径13φ	口縁部片	
19	51019	土師器	皿	残高6.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	やや不具	鉄線→2.5mmの白色 線跡を多く含む	内:径10φ	口縁部片	銅線片
20	51020	土師器	皿	底径15.2 高4.6	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	やや不具	鉄線→3mmの白色・ 黒色中継を多く含む	内:径2.0φ	口縁部片	1/2程度
21	51021	土師器	高杯	残高2.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	やや不具	鉄線→1mmの線跡を 含む	内:径10φ	口縁部片	銅線片1/2 程度
22	51022	土師器	高杯	底径16.4 残高16.1	内:ヨコナガ	良好	鉄線→2mmの白色 線跡・金線跡を含む	内:径12φ	口縁部片	2/3同一器体の 可能性あり
23	51023	土師器	高杯	底径15.95 残高17.6	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→1mmの白色・ 黒色線跡を含む	内:径10φ	口縁部片	2/3程度
24	51024	煮炊器	杯	底径12.2 残高5.9	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→1mmの白色・ 黒色線跡を含む	内:径7.0φ	口縁部片	口縁部→真 鍮片
25	51025	煮生土器	皿	残高2.7	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→2.5mmの白色 線跡を多く含む	内:径12φ	口縁部片	底面片
26	51026	煮生土器	皿	径25.6 底径7.2 高26.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→1mmの白色・ 黒色線跡を含む	内:径7.0φ	口縁部片	2/3程度
27	51027	煮生土器	皿	底径13.2 残高21.7	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの線跡を 少量含む	内:径10φ	口縁部片	口縁部→銅 線片
28	51028	煮生土器	皿	底径12.4 残高1.9	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの中継を 多く含む	内:径10φ	口縁部片	銅線→底 部片
29	51029	煮生土器	皿	底径15.7φ 残高1.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの白色 線跡・金線跡を含む	内:径11φ	口縁部片	底面片
30	51030	土師器	皿	残高1.6	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの線跡を 少量含む	内:径10φ	口縁部片	底面片
31	51031	土師器	高杯	底径15.6 残高19.9	内:ヨコナガ	良好	鉄線→3mmの中継を 多く含む	内:径7.0φ	口縁部片	銅線片
32	51032	土師器	高杯	底径18.8 残高22.5	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→2mmの白色線 跡を多く含む	内:径7.0φ	口縁部片	銅線片
33	51033	煮炊器	杯	底径12.8 残高3.7	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→1mmの白色線 跡を少量含む	内:径10φ	口縁部片	口縁部片
34	51034	煮炊器	杯	底径16.9 残高2.7	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→1.5mmの白色 線跡を少量含む	内:径10φ	口縁部片	口縁部片
35	51035	煮炊器	高杯	底径11.9 残高1.9	内:同径ナガ 外:同径ナガ	良好	鉄線→2mmの白色線 跡を少量含む	内:径10φ	口縁部片	底面片
36	51036	煮生土器	皿	残高4.2	内:ヨコナガ 外:ヨコナガ	良好	鉄線→2mmの線跡を 少量含む	内:径10φ	口縁部片	底面片

表2 I区出土遺物観察表1

番号	山上遺構	類別	遺構	法量(m)	遺構	構造	地上	色調	特色	備考
37	SK011	埋設部	基	残高4.2	内:内蔵ナブ 外:内蔵ナブ	良好	残高-2.5mの白色焼跡を含む	内:灰(11.0) 7/1 外:土(10+灰) 8/3	遺構片	
38	SK014	養生土留	壁	残高1.0 残高1.2	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	中々不良	残高-6mの中継土多量を含む	内:残高100 8/8 外:遺跡 5/8 7/8	山笠型-鉄筋部	
39	SK015	養生土留	壁	残高0.6 残高1.15	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	良好	残高-5mの白色中継土多量を含む	内:土(10+焼跡) 1/4 外:土(10+焼跡) 10/4	遺構片	
40	SK016	養生土留	庇	残高4.0	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+礎石ナブ付	良好	残高-5mの白色焼跡土多量を含む	内:土(10+焼跡) 1/3 5/4	山笠型片	
41	SK018	養生土留	壁	残高0.2 残高0.6	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	良好	残高-6mの焼跡土多量を含む	内:残高100 4/1 外:遺跡 2.5/8 6/8	山笠型-遺構片	
42	SK019	養生土留	壁	残高2.95	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	良好	残高-5mの白色焼跡土多量を含む	内:焼跡 1/10 5/6	山笠型片	
43	SK019	養生土留	壁	残高0.4 残高4.8	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	良好	残高-5mの白色中継土多量を含む	内:焼跡 2/8 外:土(10+焼跡) 2/8 3/4	遺構片	
44	SK019	養生土留	壁	残高4.2	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	良好	残高-5mの白色焼跡土多量を含む	内:土(10+焼跡) 4/4 外:土(10+焼跡) 10/4	遺構片	
45	SK021	階段	集	残高0.8 残高0.8	内:内蔵ナブ 外:内蔵ナブ	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	内:土(10) 6/2	遺構片	
46	SK022	礎石	基	残高1.0 残高1.4	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	1/3程度	
47	SK024	養生土留	庇	残高0.4 残高0.9	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ	良好	残高-3mの焼跡を含む	内:土(10+焼跡) 10/4 外:遺跡 8/6,土(10+焼跡) 6/4	山笠型-遺構片	
48	SK024	埋設部	礎	残高1.15 残高0.2	内:内蔵ナブ 外:内蔵ナブ+灰土ナブ付	良好	残高-2.5mの白色・黄色焼跡土を含む	内:灰(10) 4/1 外:灰(5)	山笠型	
49	SK024	礎石	基	残高0.2 残高2.0	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	山笠型文様(山笠型)表行	
50	SK025	養生土留	壁	残高0.6 残高0.7	内:ヨコナブ 外:ヨコナブ+タテナブ	良好	残高-4.5mの白色・黄色焼跡土を含む	内:焼跡 2/8 外:赤砂(10) 4/6,赤砂(10) 6/8	山笠型-遺構片	
51	SK025	瓦葺土留	蓋	残高最大0.9 残高0.3	内:ヨコナブ 外:型押し	中々不良	残高-6.5mの焼跡土多量を含む	内:灰(5) 4/1 外:灰(5)	制瓦片	蓋の可能性も有
52	SK025	瓦葺土留	木柱	残高0.4	内:ヨコナブ+ナブ 外:ヨコナブ+ナブ	中々不良	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	内:灰(5) 4/1 外:灰(5)	土(10)部片	
53	SK025	瓦葺土留	溝蓋	1.0 1.0	内:ヨコナブ 外:型押し	中々不良	残高-1mの白色焼跡土多量を含む	内:灰(10) 4/1 外:灰(10) 1/1	1/3程度	
54	SK025	階段	基	残高1.0 残高1.6	内:コナナブ+礎 外:コナナブ+礎	良好	残高-5mの白色焼跡土多量を含む	基礎:土(10+焼跡) 10/4 焼:遺跡(1) 1/1	山笠型片	
55	SK025	階段	礎	残高1.0 残高1.2	内:コナナブ+礎 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 10/4 焼:灰(11) 8/2 焼:灰(12) 3/2	1/3程度	埋設部
56	SK025	台座	基	残高1.2 残高1.3	内:コナナブ 外:コナナブ+礎	良好	残高2.0焼跡土を含む	基礎:灰(11) 10/4 焼:明灰(10) 7/1	制瓦-遺構片	
57	SK025	礎石	基	残高0.8 残高1.5	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	1/3程度	灰土(10)部片
58	SK025	礎石	基	残高1.0 残高1.7	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 7/1 焼:明灰(10) 7/1	山笠型-鉄筋部	
59	SK025	礎石	基	残高1.2 残高1.3	内:コナナブ+型押し 外:コナナブ+型押し	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(11) 10/4 焼:明灰(10) 7/1	山笠型片	面状口縁
60	SK025	礎石	基	残高0.4 残高0.6	内:コナナブ+礎 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	1/3程度	
61	SK025	礎石	基	残高0.6 残高0.9	内:コナナブ+礎 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	1/3程度	
62	SK025	礎石	基	残高1.1	内:コナナブ+礎 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	制瓦片	
63	SK025	瓦葺土留	大瓦片	1.0 1.0	内:ナブ+1/3ナブ 外:ナブ+1/3ナブ	良好	残高-5mの白色焼跡土を含む	内:外:残高100 8/4	山笠型	「1」の設置
64	SK025	階段	溝蓋	1.0 1.0	内:内蔵ナブ 外:内蔵ナブ	良好	残高-6mの白色焼跡土多量を含む	内:外:遺跡 1/8 2/4	山笠型	遺構片
65	SK025	階段	木留	残高1.2 残高1.1	内:内蔵ナブ+礎 外:内蔵ナブ+礎	良好	残高2.0焼跡土を含む	基礎:土(10+焼跡) 10/4 焼:明灰(10) 3/2	山笠型片	
66	SK025	階段	礎石	残高0.4	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ	良好	残高2.0焼跡土を含む	基礎:土(10+焼跡) 10/4 焼:明灰(10) 4/1	山笠型片	上野・溝蓋表
67	SK025	階段	礎石	残高1.7	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ	良好	残高2.0焼跡土を含む	基礎:土(10) 8/4 焼:遺跡 1/10 2/1	山笠型片	上野・溝蓋表
68	SK025	礎石	基	残高0.4 残高1.3	内:コナナブ+礎付 外:コナナブ+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	遺構片	
69	SK025	台座	溝蓋	1.0 1.4 1.6	内:型押し+礎 外:型押し+礎	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	内:灰(11) 8/1 外:灰(12) 8/1,赤砂(10) 5/8 7/4	制瓦片	
70	SK025	台座	溝蓋	残高2.1	内:赤砂+1/3土+礎付 外:赤砂+1/3土+礎付	良好	残高-1.5mの焼跡土多量を含む	基礎:灰(10) 8/1 焼:明灰(10) 7/1	制瓦片	
71	SK030	礎石	溝蓋	残高4.8	内:ナブ+赤瓦文 外:ナブ+赤瓦文	良好	残高-2mの白色・黄色焼跡土を含む	内:赤砂(10) 8/2 外:赤砂(10) 8/2,遺跡 5/8 7/8	山笠型片	溝蓋片

表3 1区出土遺物観察表2

番号	出土遺物	種別	品名	法量 (cm)	調査	場所	出土	品名	法量	保存	備考
72	30036	縄文土器	深鉢	径高4.4	内:ナツブー-黒文 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→tanの白点模様 外:浅黄緑 10.8 3/2 内:浅黄緑 10.8 3/2	内:浅黄緑 10.8 3/2 外:浅黄緑 10.8 3/2	貝原	縄文片	縄文式
73	30036	縄文土器	深鉢	径高4.5	内:ナツブー-黒文 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→1.5mmの白点・黒 色模様を含む	内:12.1→10.7 10.8 7/4 外:12.1→10.7 10.8 6/4	貝原	縄文片	縄文式
74	30036	縄文土器	深鉢	径高4.5	内:ナツブー-黒文 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→tanの白点模 柄・黒点付を含む	内:反黄緑 10.8 4/2 外:反黄緑 10.8 6/2, 浅黄緑 10.8 3/2	貝原	縄文片	縄文式
75	30037	縄文土器	深鉢	径高6.7	内:ナツブー-黒文 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→tanの白点模 柄・黒点付を含む	内:10.8 2/4 外:10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
76	30037	縄文土器	深鉢	径高4.8	内:ナツブー-黒文 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→tanの白点模 柄・黒点付を含む	内:12.1→10.7 10.8 7/4 外:12.1→10.7 10.8 7/4	貝原	縄文片	縄文式
77	30037	縄文土器	深鉢	径高2.9	ナツブー 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→tanの白点・黒 色模様を含む	内:10.8 6/4 外:12.1→10.7 10.8 6/4	貝原	縄文片	縄文式
78	30037	縄文土器	深鉢	径高4.3	内:ナツブー-黒文 外:ナツブー-黒文	貝原	黒線→tanの白点・黒 色模様を含む	内:浅黄緑 10.8 3/2 外:12.1→10.7 10.8 2/2	貝原	縄文片	縄文式
79	30038	白磁	小皿	直径10.0径12.0 高さ4.3	内:ロクロナツブー-黒線→見込彫り線模様 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒線模様を含む	黒線 径10.0 7/2 黒線 明黄緑 10.8 2/2	貝原	白磁片	白磁式
80	30040	染付	小鉢	直径10.0径12.0 高さ4.6	内:ロクロナツブー-黒線→見込彫り線模様 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒線	黒線 径10.0 7/2 黒線 明黄緑 10.8 2/2	貝原	白磁片	白磁式
81	30040	白磁	鉢	直径10.0径12.0 高さ4.6	内:ロクロナツブー-黒線 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒点	黒線 径10.0 7/2 7/4 黒線 明オリーブ 径10.0 7/2	貝原	白磁片	白磁式
82	30042	赤生土器	壺	直径10.0径11.1 径高5.8	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	貝原	黒線→tanの中線を含む	内:12.1→10.7 10.8 2/4 外:10.8 2/4 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
83	30042	赤生土器	壺	直径10.0径10.8 径高4.6	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー-ナツブーハク	貝原	黒線→tanの白点模様 を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
84	30042	赤生土器	壺	直径10.0径10.8 径高4.6	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	貝原	黒線→tanの白点模様 を含む	内:明黄緑 10.8 2/4 外:10.8 2/4 12.1→10.7 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
85	30042	赤生土器	壺?	直径10.0径10.2 径高5.9	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	貝原	黒線→1.5mmの白点模 様を含む	内:10.8 6/4 外:10.8 2/4 10.8 4/4	貝原	縄文片	縄文式
86	30042	土師器	高戸	径高1.9	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	貝原	黒線→1.5mmの黒線 模様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	伊原	土師片	土師式
87	30042	土師器	子取土師	径高1.7 径高2.6	内:ナツブー 外:ナツブー-ナツブー	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内:反黄緑 10.8 2/2 外:反黄緑 10.8 2/2 7/2	伊原	土師片	土師式
88	30042	土師器	子取土師	径高1.8 径高1.8	内:ナツブー 外:ナツブー-ナツブー	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内外:10.8 2/2 10.8 2/2	伊原	土師片	土師式
89	30042	赤生土器	壺	径高3.5	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー-横目	貝原	黒線→tanの白点模 様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
90	30042	赤生土器	壺	直径10.0径9.6 径高4.6	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	貝原	黒線→1.5mmの白点模 様を含む	内:10.8 2/4 外:10.8 2/4 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
91	30042	赤生土器	壺	径高3.5	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー-変形ナツブー付	貝原	黒線→tanの白点模 様を含む	内:12.1→10.7 10.8 6/3 外:10.8 2/4 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
92	30042	赤生土器	壺	直径10.0径10.2 径高5.2	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	貝原	黒線→tanの白点模 様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
93	30042	赤生土器	壺	直径10.0径10.2 径高5.2	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー-ナツブーハク	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内:10.8 2/4 10.8 2/4 外:浅黄緑 10.8 3/4, 反黄緑 4/1	貝原	縄文片	縄文式
94	30042	土師器	高戸	径高3.2	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー	伊原	黒線→tanの白点模 様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	伊原	土師片	土師式
95	30042	土師器	高戸	径高3.4径4.0 径高4.6	内:ロクロナツブー-ナツブーハク 外:ロクロナツブー	伊原	黒線→tanの白点模 様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	伊原	土師片	土師式
96	30042	土師器	子取土師	径高3.4 径高1.7	内:ナツブー 外:ナツブー-ナツブー	貝原	黒線→tanの白点模 様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	伊原	土師片	土師式
97	30042	土師器	子取土師	径高2.9 径高1.6	内:ナツブー 外:ナツブー-ナツブー	貝原	黒線→1.5mmの黒線 模様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	伊原	土師片	土師式
98	30042	赤生土器	壺	径高1.9	内:10.8径10.2 外:10.8径10.2	貝原	黒線→tanの白点模 様を含む	内:反黄緑 10.8 2/4 外:黄緑 10.8 2/4, 反黄緑 10.8 4/1	貝原	縄文片	縄文式
99	30042	青磁	皿	径高10.8 径高4.6 径高3.0	内:ロクロナツブー-黒文→黒線 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒線→tanの白点・黒 色模様を含む	黒線 径10.0 7/2 7/4 黒線 明オリーブ 径10.8 6/2	伊原	青磁片	白磁式
100	30042	赤生土器	壺	径高7.6	内:10.8径10.2 外:10.8径10.2	貝原	黒線→tanの白点模 様を含む	内:反黄緑 10.8 2/4 外:10.8 2/4	貝原	縄文片	縄文式
101	30042	土師器	子取土師	径高2.2 径高4.8 径高3.7	ナツブー	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 2/4	伊原	土師片	土師式
102	30042	陶磁	磁鉢	径高3.8	内:ロクロナツブー-横目線文→黒線 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内:赤黄緑 10.8 5/4, 黄緑 10.8 2/4 外:黄緑 10.8 3/1	貝原	縄文片	土師・高取式
103	30042	陶磁	磁鉢	直径10.0径12.2 径高4.3	内:ロクロナツブー-横目線文→黒線 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内外:10.8 2/4 10.8 4/1	貝原	縄文片	土師・高取式
104	30042	陶磁	磁鉢	径高4.2	内:ロクロナツブー-横目線文→黒線 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒点	内:赤黄緑 10.8 4/4 外:反黄緑 10.8 4/2, 浅黄緑 10.8 3/4	貝原	縄文片	土師・高取式
105	30042	陶磁	磁	直径10.0径11.4 径高1.5	内:ロクロナツブー 外:ロクロナツブー-横目線文→白点付土師	貝原	黒線→tanの黒線 模様を含む	内:10.8 2/4 外:10.8 2/4	貝原	縄文片	土師・高取式
106	30042	陶磁	磁	直径10.0径10.6 径高5.9	内:ロクロナツブー-黒線 外:ロクロナツブー-黒線	貝原	黒線→tanの白点・黒 色模様を含む	内:10.8 2/4 10.8 2/4 外:12.1→10.7 10.8 6/2, 黄緑 10.8 3/2	貝原	縄文片	土師・高取式

表4 1区出土遺物観察表3

番号	出土遺物	種別	数量(個)	遺物	状況	出土	画像	保存	備考
107	SF052	陶器	茶碗 内径5.7 外径6.9	内径5.7cm-茶碗 外径6.9cm-茶碗	良好	高野寺地蔵堂遺構	遺物: 図17 7/4 断面: 図17-2 7/4 断面: 図17-3 7/4	写真・図説	遺構調査
108	SF052	陶器	水注 外径4.9	内径3.0cm-水注 外径4.9cm-水注	良好	同前	遺物: 図18 8/1 断面: 図18 8/3	写真	
109	SF052	瓦葺	瓦 内径5.4 外径1.35	内径5.4cm-瓦 外径1.35cm-瓦	良好	同前	遺物: 図19 8/1 断面: 図19 8/2	写真	瓦葺に使用
110	SF052	磁片	瓦 径5.1 外径2.5	内径5.1cm-磁片 外径2.5cm-磁片	良好	同前	遺物: 図20 8/1 断面: 図20 8/2	写真	1層瓦
111	SF052	磁片	瓦 径5.2 外径2.1	内径5.2cm-磁片 外径2.1cm-磁片	良好	同前	遺物: 図21 8/1 断面: 図21 8/2	写真	1層瓦
112	SF052	白磁	瓦 径5.2 外径2.7	内径5.2cm-磁片 外径2.7cm-磁片	良好	同前	遺物: 図22 8/1 断面: 図22 8/2	写真	2層瓦
113	SF052	白磁	瓦 径5.2 外径2.8	内径5.2cm-磁片 外径2.8cm-磁片	良好	同前	遺物: 図23 8/1 断面: 図23 8/2	写真	2層瓦
114	SF052	青磁	瓦 径5.2 外径2.9	内径5.2cm-磁片 外径2.9cm-磁片	良好	同前	遺物: 図24 8/1 断面: 図24 8/2	写真	2層瓦
115	SF052	瓦	平瓦 径5.2 外径2.4	径5.2cm-平瓦 径2.4cm-平瓦	中々	同前	断面: 図25 8/1 断面: 図25 8/2	写真	
116	遺構	柱基礎	柱石 径5.1 径5.2	内径5.1cm 径5.2cm	良好	同前	断面: 図26 8/1 断面: 図26 8/2	写真	
117	S3002	瓦葺	瓦 径4.9 径4.8 径4.8 断面: 9.9cm	径4.9cm-瓦 径4.8cm-瓦 径4.8cm-瓦	—	—	断面: 図27 6/2	写真	
118	S3002	瓦葺	瓦 径4.7 径4.7 径4.7 断面: 7.7cm	径4.7cm-瓦 径4.7cm-瓦 径4.7cm-瓦	—	—	断面: 図28 6/1	写真	
119	S3002	瓦葺	瓦 径4.9 径4.5 径4.5 断面: 7.5cm	径4.9cm-瓦 径4.5cm-瓦 径4.5cm-瓦	—	—	断面: 図29 6/2	写真	
120	S3002	瓦葺	瓦 径4.5 径4.3 径4.3 断面: 7.5cm	径4.5cm-瓦 径4.3cm-瓦 径4.3cm-瓦	—	—	断面: 図30 5/2	写真	
121	S3002	瓦葺	瓦 径4.6 径4.2 径4.2 断面: 7.5cm	径4.6cm-瓦 径4.2cm-瓦 径4.2cm-瓦	—	—	断面: 図31 6/1	写真・図説	1層瓦
122	S3002	瓦葺	瓦 径4.6 径4.2 径4.2 断面: 7.5cm	径4.6cm-瓦 径4.2cm-瓦 径4.2cm-瓦	—	—	断面: 図32 5/1	写真・図説	1層瓦
123	S3002	瓦葺	瓦 径4.6 径4.2 径4.2 断面: 9.5cm	径4.6cm-瓦 径4.2cm-瓦 径4.2cm-瓦	—	—	断面: 図33 5/1	写真・図説	1層瓦
124	S3002	瓦葺	瓦 径4.9 径4.8 径4.8 断面: 11.9cm	径4.9cm-瓦 径4.8cm-瓦 径4.8cm-瓦	—	—	断面: 図34 6/2	写真	1層瓦
125	S3002	瓦葺	瓦 径4.95 径4.35 径4.35 断面: 8.5cm	径4.95cm-瓦 径4.35cm-瓦 径4.35cm-瓦	—	—	断面: 図35 4/2	写真	瓦葺に使用
126	S3002	瓦葺	瓦 径4.25 径4.25 径4.25 断面: 5.5cm	径4.25cm-瓦 径4.25cm-瓦 径4.25cm-瓦	—	—	断面: 図36 5/4	写真	瓦葺に使用
127	S3004	瓦葺	瓦 径4.5 径4.35 径4.35 断面: 5.5cm	径4.5cm-瓦 径4.35cm-瓦 径4.35cm-瓦	—	—	断面: 図37 6/2	写真	1層瓦
128	S3014	瓦葺	瓦 径4.7 径4.8 径4.2 断面: 6.6cm	径4.7cm-瓦 径4.8cm-瓦 径4.2cm-瓦	—	—	断面: 図38 7/1	写真	瓦葺に使用
129	S3022	瓦葺	瓦 径4.9 径4.4 径4.4 断面: 7.1cm	径4.9cm-瓦 径4.4cm-瓦 径4.4cm-瓦	—	—	断面: 図39 6/1	写真	1層瓦
130	S3022	瓦葺	瓦 径4.3 径4.4 径4.4 断面: 6.9cm	径4.3cm-瓦 径4.4cm-瓦 径4.4cm-瓦	—	—	断面: 図40 7/1 断面: 図40 7/2	写真	1層瓦

表5 I区出土遺物観察表4

番号	出土遺物	種別	図像	数量 (mm)	説明	出土	出所	保存	備考	
131	38024	石器	打製石鏃	残存径1.9 幅1.7 厚0.4 重量:19g	—	—	空山荘	茨城県107 5/2	片断	
132	38026	石器	砥石	残存径4.6 幅3.7 厚2.6 重量:106.77g	—	—	堀河荘	茨城県107 8/3	小片	砥石口縁
133	38027	石器	打製石鏃	径1.9 幅1.6 厚0.35 重量:77g	—	—	空山荘	茨城県107 5/1	ほぼ完整	片断式
134	38028	石器	磨製石斧	残存径4.6 残存幅4.6 残存厚2.1 重量95.71g	—	—	堀河荘跡	茨城県107 7/1	片断	
135	38032	石器	砥石	径9.4 幅3.6 厚2.9 重量267.72g	—	—	堀河荘	埼玉県1007 6/1	片断	砥石口縁
136	38037	石器	スクリュー	残存径7.3 幅3.7 厚2.9 重量22.29g	—	—	空山荘	埼玉県 6/1	片断	
137	38046	石器	砥石	残存径4.7 残存幅4.1 残存厚1.7 重量74.95g	—	—	堀河荘	埼玉県1007 7/4	小片	砥石口縁
138	38044	石器	打製石鏃	径2.65 幅1.95 厚0.55 重量:29g	—	—	空山荘	埼玉県1007 6/4, 茨城県107 6/1	片断	片断式
139	38051	石器	緑泥石製石鏃	残存径4.6 幅3.9 厚1.3 重量:38.95g	—	—	緑泥石製	埼玉県1007 6/1	ほぼ完整	
140	38051	石器	磨製石斧	残存径8.95 幅6.1 厚2.95 重量278.94g	—	—	緑泥石製	埼玉県1007 6/1, 埼玉県1007 5/1	片断	
141	38059	石器	ナイフ状石鏃	径2.7 幅1.8 厚2.2 重量:41g	—	—	磨礫石	茨城県107 2/1	片断	
142	38052	石器	打製石鏃	径3.4 幅1.9 厚0.55 重量:47g	—	—	磨礫石	茨城県107 6/1	片断	片断式
143	38058	石器	打製石鏃	残存径1.6 残存幅1.3 厚0.4 重量:39g	—	—	磨礫石	茨城県107 5/1	ほぼ完整	片断式
144	3806	石器	スクリュー	径3.55 幅3.1 厚0.7 重量:39g	—	—	磨礫石	埼玉県1007 5/1	片断	
145	3806	石器	打製石鏃	径1.55 幅1.3 厚0.55 重量:29g	—	—	空山荘	茨城県107 5/1	片断	片断式
146	3806	石器	打製石鏃	残存径1.3 残存幅1.4 厚0.4 重量:39g	—	—	磨礫石	茨城県107 6/1	ほぼ完整	片断式
147	3806	石器	打製石鏃	径1.5 幅1.3 厚0.3 重量:39g	—	—	磨礫石	茨城県107 5/1	片断	片断式
148	3806	石器	打製石鏃	径2.1 幅1.7 厚0.4 重量:47g	—	—	磨礫石	茨城県107 6/2, 茨城県107 5/1	片断	片断式
149	3806	石器	打製石鏃	残存径3.5 残存幅1.6 厚0.5 重量:41g	—	—	片断?	茨城県107 5/2	ほぼ完整	片断式
150	3806	石器	石鏃	径3.25 幅2.9 厚0.9 重量:41.06g	—	—	磨礫石	埼玉県1007 5/2	片断	

表6 I区出土遺物観察表5

### 第3節 II区の調査

#### (1) 竪穴建物

##### SI001 (第36・37図、図版29・30・38)

調査区東側の北寄りで確認した。SI002と近接する。北壁と西壁、東壁の一部が残存し、南側から西側にかけて大きく削平を受けている。検出できた範囲で北壁長2.85m、西壁長1.65m、東壁長1.2mを測る。床面上では3つの柱穴を検出した。そのうち2つは直径、深さともに約50cmで主柱穴になると考えられる。この主柱穴の配置と北壁から西壁が直角に折れるコーナーを持つことから、SI001は4本主柱穴をもつ一辺4.2m程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは10cm程残っていた。壁溝は無かった。出土遺物には土師器、須恵器がある。

**土師器** 1～4は甕。1は口縁部から胴部上半の破片で、肥厚した口縁をもつ。端部は短く外反する。復元口径20.3cm。2も口縁部から胴部上半の破片。器壁の厚さは均一で口縁は外反する。3は口縁部片。口縁は短く外反し、端部を摘み上げて仕上げる。復元口径17.0cm。4は胴部の破片である。5・6は高坏。5は坏部片で復元口径14.4cmを測る。6は脚部片。

**須恵器** 7は坏身。口縁部片で復元口径11.2cmを測る。8は蓋。ほぼ完形で口径9.5cm、器高3.7cm。その大きさから短頸壺の蓋になるうか。9は甕。口縁端部の小片。端部は嘴状に尖り、直下に2条の沈線、その下位に波状文を櫛描きする。

##### SI002 (第36図、図版29・30)

調査区東側の北寄りで検出した。SI001と近接する。全体が大きく削平されるが、北壁と西壁の一部が残存する。検出できた範囲で北壁長2.7m、西壁長3.8mを測る。床面上では4本の主柱穴を検出した。いずれも直径50cm、深さ40cm程である。北壁から西壁が直角に折れるコーナーを持つことと主柱穴の配置より、SI002は4本主柱穴をもつ一辺4.3m程の方形プランの竪穴建物に復元できる。建物の壁の立ち上がりは西側で約10cm残っていた。壁溝はめぐらない。出土遺物は無かった。

#### (2) 掘立柱建物

##### SB003 (第38図、図版29～31)

調査区東側の北寄りで検出した。北側の柱穴が調査区外にはみ出ているが、2間×2間の総柱の掘立柱建物と判断できる。またそれぞれの柱穴には別の柱穴が重複しており、建物の建て替えが行われたことが分かる。北側の柱列では当初の建物は方位をN-64°-Eに取るが、建て替え後はN-58°-Eとなり、若干方向を西に振って建て替えを行っている。当初の建物の柱間は東側で1.7m、西側で1.7m間隔、南側で1.55m間隔、北側で1.6mを測ることから、平面プランは正方形に近い形状となる。柱穴は直径30～50cm、深さ25～45cmを測る。出土遺物は無かった。

#### (3) 土坑

調査区では複数の土坑を検出したが、ここでは遺物が出土した1つの土坑を報告する。

##### SK004 (第35・39図、図版31・38)

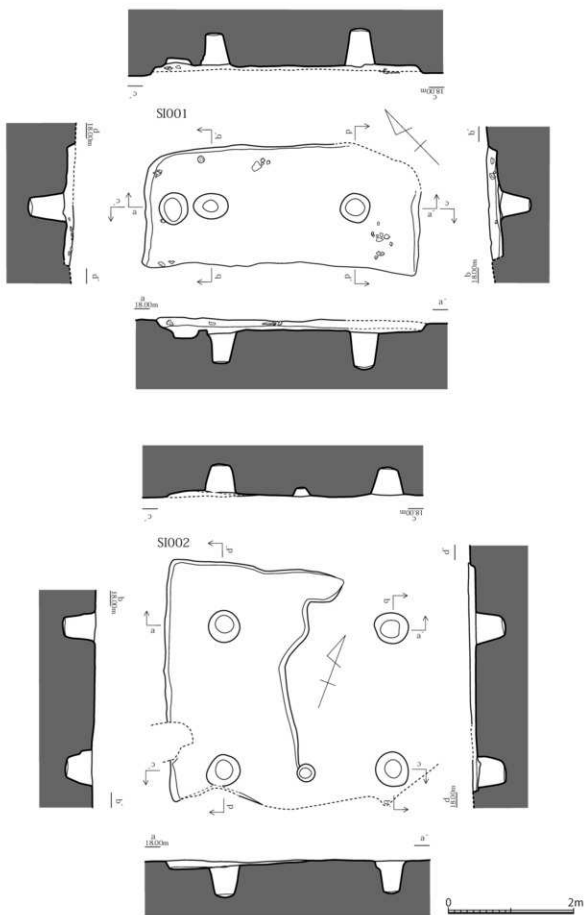
調査区中央の北側で検出した。SD006に切られる。長軸720cm、短軸530cmの不整形な楕円形を呈する大型の土坑である。深さは10～20cm程度と浅く、床面には多くの小穴を有する。土師器と須恵器が出土した。

**土師器** 10は甕。口縁部の小片である。端部は短く外反する。

**須恵器** 11は坏身。口縁部から底部の小片。



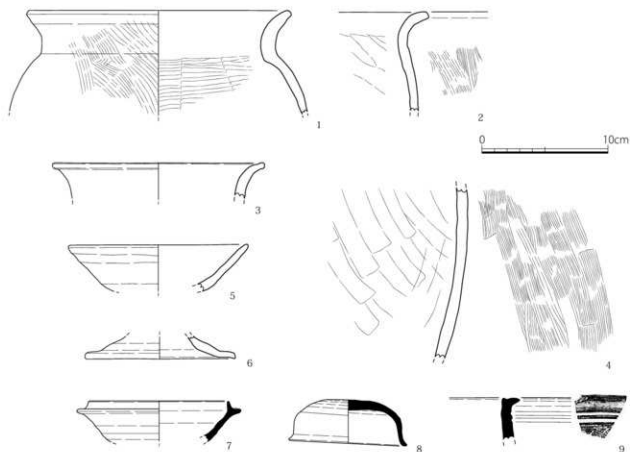
第 35 图 II 区遗址配置图 (1/300)



第 36 图 Ⅱ区 S1001·002 实测图 (1/60)



SI001



第37図 II区出土土器実測図1 (1/3)

#### (4) 溝

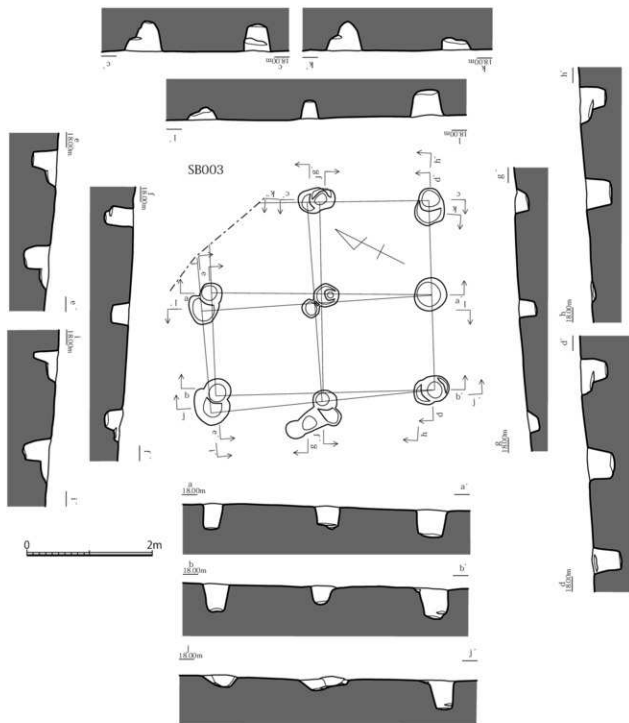
調査区では多くの溝を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に主要なものだけを報告する。

SD005 (第35・40～43図、図版31～33・38～40)

調査区の東側で検出した。SD007に切られる。北西から南東方向に伸びており、南東側は調査区外に続き、北西側は開削を受け削られている。検出できた範囲で長さ60m余り、最大幅5m前後を測る大きな溝で、深さは現状で約50cmを測る。集落を区画した溝であろう。4ヶ所にベルトを設けて土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて埋まったと考えられる。弥生土器や土師器、須恵器など多くの遺物が出土した。

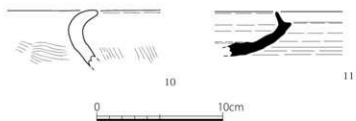
弥生土器 12・13・15は甕。12は口縁部片。復元口径41.6cmを測る。くの字形口縁で端部を跳ね上げて仕上げる、遠賀川以東に多く分布する特徴を示す。頸部直下には1条の三角突帯をめぐらす。13は頸部片。1条の突帯をめぐらす。15は底部片。14は壺。胴部片で2条のM字突帯をめぐらす。丹塗磨研土器。

土師器 16～21は坏。16・17は底部の小片。18は3分の1程を残す破片で、復元口径12.4cm、器高3.2cmを測る。19は3分の1程度の破片。丸みを帯びた体部となる。復元口径12.8cm。20は底部を欠く。口径13.3cmを測る。21は口縁部片。薄手でシャープな造りである。復元口径14.2cmを測る。22～24は高坏。22・23は坏部から脚部の小片。24は脚部片。25～29は甕。25は口縁部片。くの字形をなす。復元口径22.0cm。26は口縁部から体部上半の破片。くの字形口縁となる。復元口径21.2cmを測る。

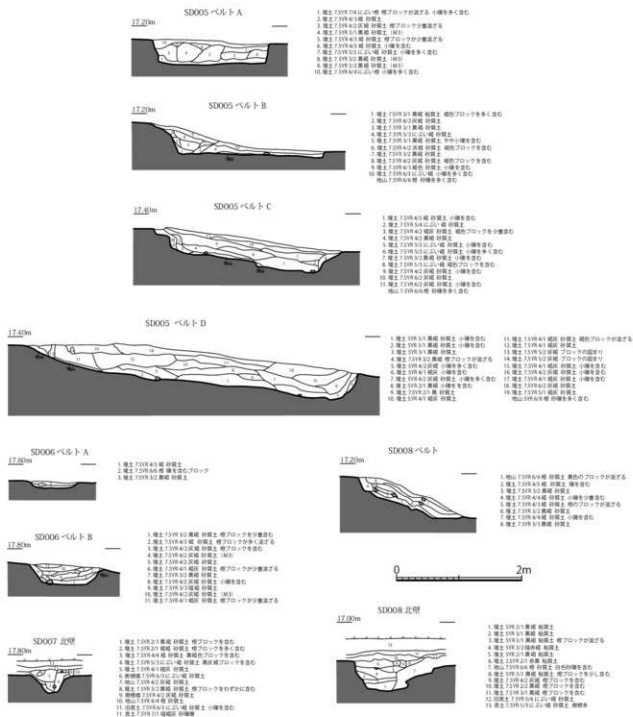


第38图 Ⅱ区SB003实测图(1/60)

SK004



第39图 Ⅱ区出土土器实测图2(1/3)

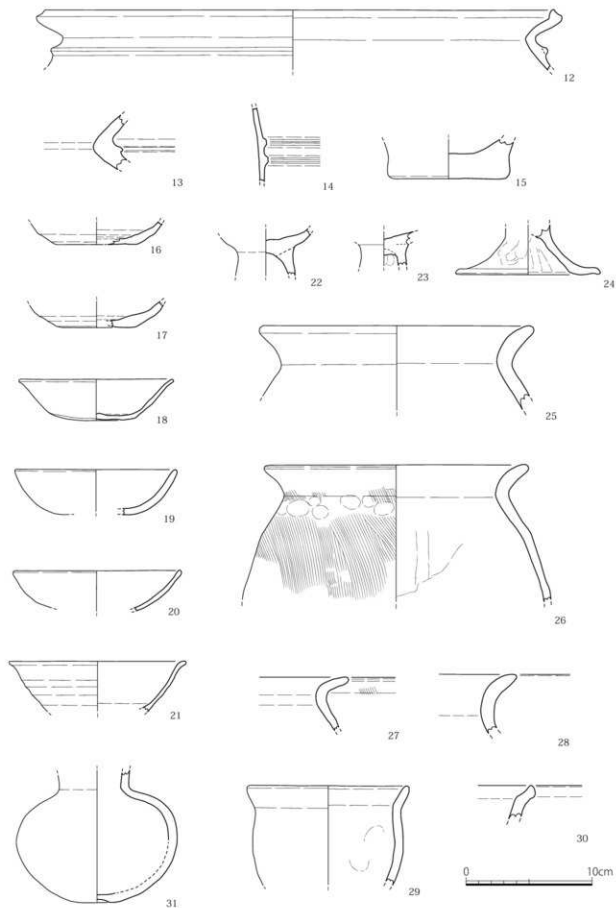


第 40 図 II 区 SD005・006・007・008 土層断面実測図 (1/60)

27・28は口縁部の小片。29は口縁部から胴部下半の破片。小型品で復元口径13.0cmを測る。30は鉢か。口縁部片。31は壺。口縁部を欠く。体部は球形で丸底となる。32～34は甔。32は4分の3程度を残し、復元口径23.5cm、器高21.95cmを測る。33・34は把手片。

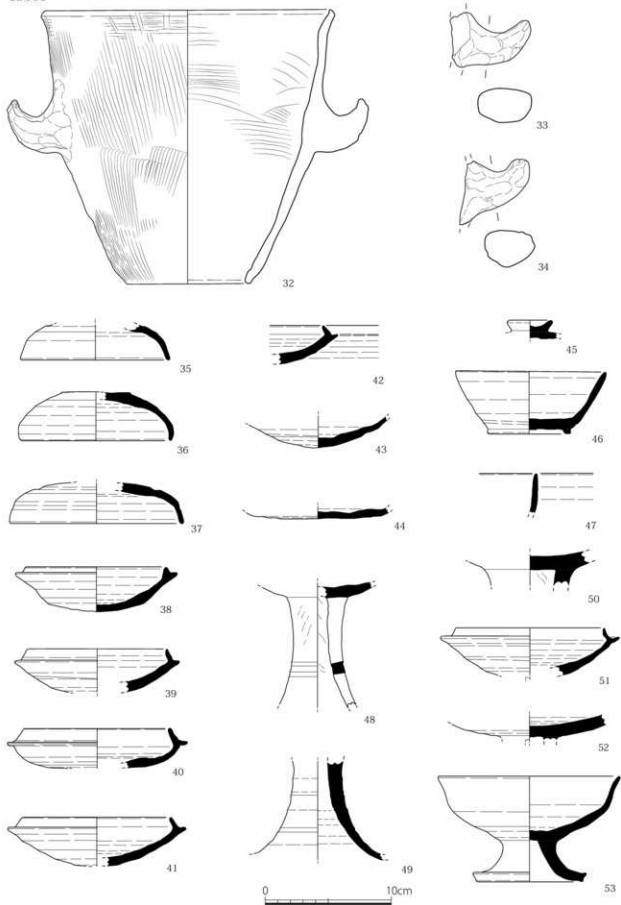
須臾器 35～37は坏蓋。35は口縁部片。復元口径12.0cmを測る。36・37は口縁部から天井部の破片。36は復元口径12.0cm、器高3.85cmを測る。37は復元口径14.0cm。38～43は坏身。38は2分の1程度を残す破片で、口径11.3cm、器高3.6cmを測る。39は4分の1程の破片。復元口径11.2cmを測る。

SD005



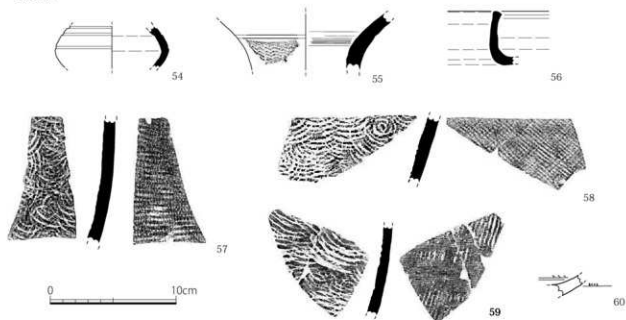
第41图 II区出土土器实测图3 (1/3)

SD005



第42图 II区出土土器实测图4 (1/3)

SD005



第43図 II区出土土器実測図5 (1/3)

40は3分の1程度で、復元口径11.6cmを測る。41は3分の1程度を残す。復元口径11.8cm。42は口縁部片。43は底部片。44は皿か。底部片で復元底径8.4cmを測る。45は蓋。摘部の小片。46・47は塊。46は3分の2程度の破片で全形をうかがえる。小型品で口径11.5cm、底径6.65cm、器高4.95cmを測る。47は口縁部片。48～53は高環。48は坏部から脚部の破片。長脚で2方向2段の透かしをもつ。49は脚部片。50は坏部から脚部の破片。比較的大型品である。51は坏部片で3分の2程度を残す。口径11.9cmを測る。底部には透かし孔の切り込みがある。52は坏部片。底部に2方向の透かし孔の切り込みがある。53は全体の2分の1程度を残し、復元口径14.6cm、器高8.35cmを測る。無蓋の環に喇叭状に広がる短い脚が付く。54・55は壺。54は胴部片で、上半には3条の沈線をめぐらす。55は口縁部片で端部を欠く。外面には波状文を櫛描きする。56～59は甕。56は口縁部片。短い直立した口縁となる。57～59は胴部片。外面はタタキが施され、59にはカキメもみられる。内面には青海波、同心円の当具痕を残す。

青磁 60は環。内外面に白色土、黒色土で模様を象嵌し、釉薬を施す。高麗青磁ないしは粉青沙器と考えられる。

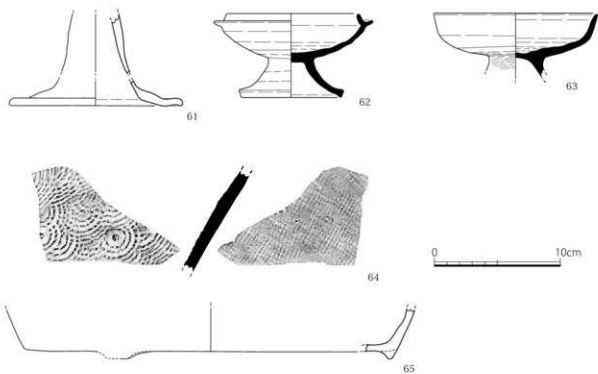
#### SD006 (第35・40・44図、図版34・35・40)

調査区の東側で検出した。SK004、SD007を切る。SD005と平行するように北西から南東方向に伸びている。東側は開削を受け削られている。一部途切れているものの検出できた範囲で長さ75m余り、最大幅1.4mを測る。削平を受けていると考えられ、深さは現状で約30cm程しかない。西寄りの2ヶ所にベルトを掛けて土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて埋まったと考えられる。土師器や須恵器などが出土した。

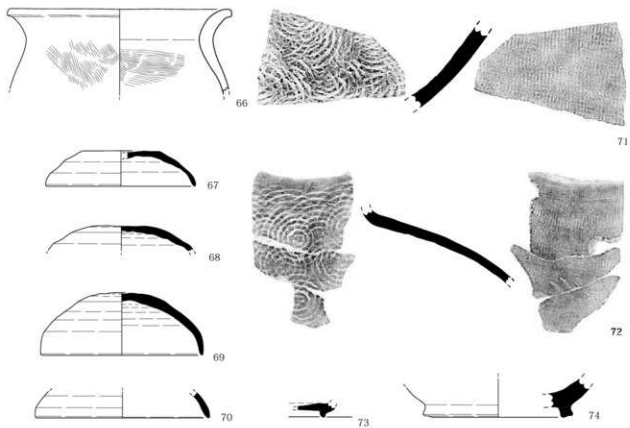
土師器 61は高環。脚部の2片がある。

須恵器 62・63は高環。62は有蓋高環で4分の3程が残る。短脚である。口径10.6cm、器高6.7cmを測る。63は坏部から脚部の破片。無蓋高環と考えられる。口径13.0cm。64は甕。胴部片で外面にタ

SD006



SD008



第 44 图 II 区出土土器实测图 6 (1/3)

タキを施し、内面には青海波、同心円の当具痕を残す。

瓦質土器 65 は鉢か。底部片で3脚を有する。

#### SD007 (第35・40図、図版32・35)

調査区の東側で検出した。SD005を切り、SD006に切られる。SD005やSD006と平行して南東から北西方向に伸びているが、途中で北東方向へ直角に曲がり調査区外へと続く。検出できた範囲で長さ約50m、最大幅約1mを測る。調査区外へと続く北壁で土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて溝が埋まったと解釈できる。またSD005の土層断面図(ベルトA・B)の観察からSD007がSD005を切ることが分かる。出土遺物は無かった。

#### SD008 (第35・40・44図、図版35・36・40)

調査区の西側で検出した。ちょうど棚田状に開削された段の外縁に沿って東から北西方向に伸びる。北西側は調査区外へと続いている。SD005の続きの可能性もある。検出できた範囲で長さ28m、最大幅2m程を測る。1ヶ所にベルトを設けて土層断面図を作成した。あわせて調査区外へと続く北壁で土層断面図を作成した。土層観察からは時間をかけて溝が埋まったと考えることができる。出土遺物には土師器、須恵器がある。

土師器 66 は甕。口縁部から胴部上半の破片。口縁は肥厚して、端部は短く外反する。復元口径17.8cmを測る。

須恵器 67～70は坏蓋。67は6分の1程の破片で、復元口径12.0cm、器高2.85cmを測る。68は天井部の破片。69は3分の1程の破片で、復元口径12.8cm、器高5.0cmを測る。口径に比して器高が高い。70は口縁部片。復元口径14.0cm。71・72は甕。71は胴部下半、72は胴部上半の破片。外面にタキを施し、内面に青海波文、同心円文の当具痕を残す。73は埴。底部の小片。74は壺。長頸壺の底部の破片と考えられる。

#### SD009 (第35図、図版36)

調査区の中央で検出した。棚田状に開削された段の裾部を南東から北西方向に伸び、途中で南西方向に折れ曲がる。検出できた範囲で長さ36m、幅0.3m程を測る。水田の用水路であろうか。出土遺物は無かった。

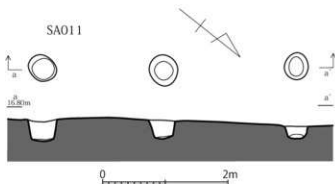
#### SD010 (第35図、図版37)

調査区の西側で検出した。南東から北西方向に伸び、北側は調査区外へと続いている。検出できた範囲で長さ30m、最大幅0.5m程を測る。出土遺物は無かった。

### (5) 柵

#### SA011 (第45図、図版37)

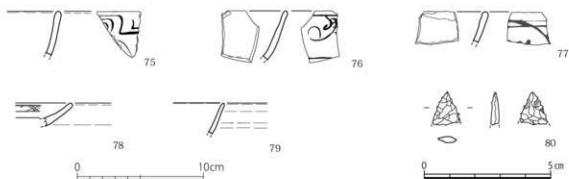
調査区東側の南寄りで検出した。南西側が階段状に開削を受けているので、掘立柱建物の柱列と考えることもできるが、ここでは柵として報告を行う。柱穴は直径40～50cm、深さ20～30cmの柱穴が3つ並ぶ。柱列は方位をN-39°-Wにとる。柱間は北側より2.1m、1.9mを測る。出土遺物は無かった。



第45図 II区 SA011実測図(1/60)



表採



第46図 II区採集土器・石器実測図(1/3・2/3)

(6) 採集遺物(第46図、図版40)

表面採集遺物に陶磁器と打製石畿がある。

青磁 75は碗。口縁部の小片。外面上縁に雷文帯を有する。

染付 76は碗。口縁部片で中国明代の青花と考えられる。78は皿。内面に絵付けを行う。軸葉は少し青みを帯びている。

陶器 77・79は碗。77は陶胎染付。口縁部の小片である。79は口縁部片。藁灰釉を施釉する。

石器 80は打製石畿。先端部の小片である。安山岩製。

番号	出土遺物	種別	品類	数量(個)	調整	状況	船主	色別	残存	備考
1	S3001	土師器	甕	復元口徑20.3 残高3.3	内:ヨコナデ-3コホケ 外:ヨコナデ-サタハケ	良好	黒緑~3mmの白色線粒を多く含む	内:浅黄緑:338 3/4 外:明赤緑:338 3/8	口縁部一部剥片	
2	S3001	土師器	甕	残高7.9	内:ヨコナデ-アゴゾリ 外:ヨコナデ-サタハケ	良好	黒緑~2mmの白色・黒色粗粒を含む	内:浅黄緑:338 3/4 外:白~黄緑:338 7/8 外:白~黄緑:338 7/8	口縁部一部剥片	
3	S3001	土師器	甕	復元口徑17.6 残高2.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒緑~3mmの白色線粒を含む	内外:白~黄緑:338 1/4	口縁剥片	
4	S3001	土師器	甕	残高13.6	内:ヨコナデ-アゴゾリ 外:ヨコナデ-サタハケ	良好	黒緑~1mmの白色粗粒・黒粒を多く含む	内:白~黄緑:338 5/8 外:白~黄緑:338 5/8	剥片	
5	S3001	土師器	高杯	復元口徑14.4 残高2.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒緑~3.5mmの白色線粒を多く含む	内:黄緑:338 5/8 外:明赤:338 5/8,赤138 5/8	口縁剥片	
6	S3001	土師器	高杯	復元口徑12.6 残高1.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を含む	内:黄緑:338 6/8 外:黄緑:338 6/8,赤138 5/8	剥片	
7	S3001	須恵器	円筒	復元口徑13.2 残高3.3	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-道田陶板ヘラタズリ	良好	黒緑~1mmの白色粗粒を少量含む	内外:灰黒:33 6/2	口縁剥片	
8	S3001	須恵器	甕	口径3.3 高3.7	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-灰田陶板ヘラタズリ	良好	黒緑~1mmの白色粗粒を含む	内:灰黒:33 1/2 外:灰黒:6/2	口縁剥片	
9	S3001	須恵器	甕	残高3.35	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-灰田陶板ヘラタズリ	良好	黒緑~1mmの白色粗粒を多く含む	内:灰黒:33 1/2 外:灰黒:6/2	口縁剥片	
10	S3004	土師器	甕	残高4.5	内:ヨコナデ-3コホケ 外:ヨコナデ-サタハケ	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を多く含む	内:黄緑:338 7/8 外:浅黄緑:338 3/8	口縁剥片	
11	S3004	須恵器	円筒	残高2.50	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-道田陶板ヘラタズリ	良好	黒緑~1mmの白色粗粒を含む	内外:アゴゾリ:363 1/2	口縁部一部剥片	
12	S3005	衛生土器	甕	復元口徑11.6 残高4.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-吸着ナデ付付	良好	黒緑~3mmの半粒を多く含む	内:黄緑:338 6/8 外:黄緑:338 6/8	口縁剥片	
13	S3005	衛生土器	甕	残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-吸着ナデ付付	良好	黒緑~3mmの白色半粒を含む	内外:黄緑:338 6/8	剥片	
14	S3005	衛生土器	甕	残高3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-吸着ナデ付付	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を多く含む	内外:黄緑:338 6/8	剥片	内面磨削土器
15	S3005	衛生土器	甕	復元口徑10.3 残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒緑~1mmの白色半粒を多く含む	内:黄緑:338 5/8 外:明赤緑:338 3/8	剥片	
16	S3005	土師器	杯	復元口徑8.4 残高1.80	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-道田ヘラタズリ	中々不良	黒緑~1mmの白色粗粒を少量含む	内:灰黒:33 6/2 外:浅黄緑:33 3/8	剥片	
17	S3005	土師器	杯	復元口徑8.4 残高1.7	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-道田ヘラタズリ	良好	黒緑~1.5mmの白色粗粒を含む	内:黄緑:338 6/8 外:黄緑:338 6/8	剥片	
18	S3005	土師器	杯	復元口徑12.4 底径1.15 高3.2	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ-道田ヘラタズリ	良好	黒緑~2mmの白色粗粒・黄粒を含む	内:黄緑:338 6/8 外:黄緑:338 6/8,赤138 5/8	口縁剥片	
19	S3005	土師器	杯	復元口徑12.8 残高3.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を含む	内外:黄緑:338 6/8	口縁剥片	
20	S3005	土師器	杯	口径13.3 残高3.25	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-ヘラタズリ	良好	黒緑~2mmの白色・黒色粗粒を含む	内外:黄緑:338 6/8	底面剥片	
21	S3005	土師器	杯	復元口徑14.2 残高4.8	内:羽黒ナデ 外:羽黒ナデ	良好	黒緑~1mmの白色粗粒を少量含む	内外:黄緑:338 6/8	口縁剥片	
22	S3005	土師器	高杯	残高3.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-磨器ナデ付付	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を含む	内外:黄緑:338 6/8	口縁一部剥片	
23	S3005	土師器	高杯	残高3.7	内:ヨコナデ-アゴオケ 外:ヨコナデ-磨器ナデ付付	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を含む	内:明赤:338 5/8 外:黄緑:338 6/8	内外一部剥片	
24	S3005	土師器	高杯	底径11.6 残高4.8	内:ヨコナデ-しぼり 外:ヨコナデ-アゴオケ	良好	黒緑~3mmの白色線粒を含む	内:白~黄緑:338 7/8 外:白~黄緑:338 7/8,黄緑:338 6/8	剥片	
25	S3005	土師器	甕	復元口徑12.6 残高2.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	中々不良	黒緑~3mmの線粒を多く含む	内外:白~黄緑:338 6/8	口縁剥片	
26	S3005	土師器	甕	復元口徑21.2 残高10.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-サタハケ・オオケ	良好	黒緑~3mmの白色・黒色粗粒を多く含む	内:白~黄緑:338 6/8,黄緑:338 6/8 外:黄緑:338 6/8,明赤:338 3/8	口縁部一部剥片	
27	S3005	土師器	甕	残高4.25	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ-サタハケ	中々不良	黒緑~3.5mmの白色粗粒を多く含む	内:白~黄緑:338 1/2,黄緑:338 6/8 外:浅黄緑:338 6/8,黄緑:338 7/8	口縁剥片	
28	S3005	土師器	甕	残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒緑~2mmの白色粗粒を含む	内外:白~黄緑:338 1/4	口縁剥片	
29	S3005	土師器	甕	復元口徑13.6 残高2.9	内:ヨコナデ-アゴオケ 外:ヨコナデ	中々不良	黒緑~1mmの粗粒を少量含む	内:白~黄緑:338 7/8 外:白~黄緑:338 6/8	口縁部一部剥片	
30	S3005	土師器	鉢	残高2.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	中々不良	黒緑~2mmの白色粗粒を含む	内:白~黄緑:338 7/8,黄緑:338 5/8 外:白~黄緑:338 6/8,灰黄緑:338 5/2	口縁剥片	
31	S3005	土師器	甕	残高10.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	中々不良	黒緑粒粗粒を含む	内外:浅黄緑:338 6/8	口縁部剥片	
32	S3005	土師器	甕	復元口徑23.3 復元口徑19.8 高31.90	内:ヨコナデ-3コホケ 外:ヨコナデ-サタハケ	良好	黒緑~3mmの線粒を含む	内:白~黄緑:338 6/8 外:黄緑:338 6/8,白~黄緑:338 6/8	口縁剥片	
33	S3005	土師器	甕	残高1.4	ナデ・オオケ	良好	黒緑~3mmの白色線粒を含む	内外:黄緑:338 7/8	底面剥片	

表7 II区出土遺物観察表1

番号	出土遺物	種別	器種	数量 (cm)	調査	遺状	出土	位置	現存	備考
24	30005	土師器	甕	残高1.1	内子・イナエ	長形	横溝→5cmの半輪を多 く含む	内・灰2. 厚2. 5 外・灰2. 厚2. 5, 口内・黄緑1000 2/4	破片	
25	30005	瓦器	片断	横文付横2.4 残高2.45	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1.5cmの白色・ 黒色断片を含む	内・灰2. 厚 4/2 外・灰2. 厚 4/2	口縁部片	
26	30005	瓦器	片断	横文付横2.8 残高2.85	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1cmの白色断片 を多く含む	内・灰2. 厚 4/2 外・灰2. 厚 4/2	口縁部→瓦 器部片	
27	30005	瓦器	片断	横文付横3.8 残高3.25	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝	内・灰2. 厚 4/1 外・灰2. 厚3.5/3	口縁部→瓦 器部片	
28	30005	瓦器	片断	口内径2.3 残高2.6	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1cmの白色断片 を含む	内内・灰2. 厚 7/1	口縁部	
29	30005	瓦器	片断	横文付横2.2 残高2.5	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→4.5cmの横筋を 多く含む	内内・灰2. 厚1.7/2 4/2	口縁部	
30	30005	瓦器	片断	横文付横3.4 残高3.2	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1cmの白色断片 を多く含む	内・灰2. 厚 3/1 外・灰2. 厚1000 5/2	口縁部	
31	30005	瓦器	片断	横文付横3.8 残高3.9	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1cmの白色・黒 色断片を含む	内・灰2. 厚 4/2 外・灰2. 厚 7/2	口縁部	
32	30005	瓦器	片断	残高3.1	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1cmの白色断片 を多く含む	内・灰2. 厚 4/2 外・イナエ付2. 300 6/1	口縁部片	
33	30005	瓦器	片断	残高2.6	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝→1cmの横筋を少 く含む	内内・灰2. 厚 4/1	底面片	
34	30005	瓦器	蓋?	横文付横2.4 残高. 95	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ	長形	横溝の金雲目を含む	内内・口内・黄緑1000 6/5	底面片	
35	30005	瓦器	蓋	残高1.3	内子断片ナブ 外子断片ナブ→横筋ナブ付け	長形	横溝の金雲目を含む	内・灰2. 厚 1/1 外・灰2. 厚2. 3/2	底面片	
36	30005	瓦器	筒	口内径3.5 総高6.45 器高4.90	内子断片ナブ 外子断片ナブ→高台ナブ付け	長形	横溝→5cmの白色半輪 を含む	内内・灰2. 厚 2/2	土師器	
37	30005	瓦器	筒	残高3.2	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝→1cmの横筋を少 く含む	内・灰2. 厚 4/2, 黄2. 厚 4/1 外・横筋黄2. 厚 4/1	口縁部片	
38	30005	瓦器	高杯	残高28.25	内子断片ナブ→しぼり 外子断片ナブ→横筋ナブ付け→しぼり→高足部	長形	横溝→1cmの白色断片 を多く含む	内・灰2. 厚 4/1 外・横筋黄2. 厚 3/1	平底→胴部片	高足方向に破片
39	30005	瓦器	高杯	残高2.90	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝→1cmの白色断片 を含む	内内・灰2. 厚 4/1	胴部片	
40	30005	瓦器	高杯	残高2.9	内子断片ナブ→しぼり 外子断片ナブ→横筋ナブ付け	やや平直	横溝→1cmの白色断片 を含む	内内・灰2. 厚 2/2	平底→胴部片	
41	30005	瓦器	高杯	口内径3.8 残高3.8	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝→1cmの白色断片 を含む	内・灰2. 厚 5/1 外・口内・黄緑1000 5/3	平底→胴部片	高足あり
42	30005	瓦器	高杯	残高2.0	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝	内・灰2. 厚 5/1 外・灰2. 厚 6/1	底面片	高足方向
43	30005	瓦器	高杯	横文付横3.4 総高5.1 器高3.35	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→横筋ナブ付け	長形	横溝→1cmの白色断 片・雲目を含む	内内・灰2. 厚 4/2	口縁部	
44	30005	瓦器	高	残高3.3	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝→1cmの白色断片 を含む	内・灰2. 厚 4/2 外・灰2. 厚 4/1, 灰2. 厚 4/2	胴部片	
45	30005	瓦器	高	残高3.4	内子断片ナブ 外子断片ナブ→高台文	長形	横溝→1cmの白色断片 を多く含む	内内・灰2. 厚 4/2	口縁部片	
46	30005	瓦器	甕	残高3.3	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝の白色断片を少 く含む	内・横筋黄2. 厚 3/2, 灰2. 厚 4/1 外・横筋黄2. 厚 5/1, 横筋黄2. 厚 4/2	口縁部片	
47	30005	瓦器	甕	残高3.8	内子断片ナブ→(2長筒) 外子断片ナブ→トキキ	長形	横溝→1cmの白色断片 を含む	内内・灰2. 厚 4/1	胴部片	
48	30005	瓦器	甕	残高2.25	内子断片ナブ→(2長筒) 外子断片ナブ→トキキ	長形	横溝→2cmの白色断片 を多く含む	内・灰2. 厚 5/1 外・灰2. 厚 5/2	胴部片	
49	30005	瓦器	甕	残高2.40	内子断片ナブ→(2長筒) 外子断片ナブ→トキキ	長形	横溝→1cmの白色・黒 色断片を含む	内内・横筋ナブ→200 3. 300 7/1	胴部片	
50	30005	高足	高	残高1.40	内・コッパナブ→高足→横筋 外・コッパナブ→高足→横筋	長形	横溝	横筋・灰2. 厚 4/2 輪・灰2. 厚 3/1	底面片	高足部も残し、 口縁部片
51	30006	土師器	高杯	横文付横3.8 残高6.7	内・コッパナブ 外・コッパナブ	長形	横溝→5cmの白色・黒 色断片を多く含む	内内・横筋黄2. 厚 5/1	胴部片	
52	30006	瓦器	高杯	口内径3.4 総高5.0 器高4.7	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ→横筋ナブ付け	長形	横溝	内・灰2. 厚 6/1 外・灰2. 厚 4/1	口縁部	
53	30006	瓦器	高杯	口内径2.0 残高3.3	内子断片ナブ 外子断片ナブ→瓦器断片→ハラケズ→横筋ナブ付け→しぼり	長形	横溝	内・灰2. 厚 4/1 外・灰2. 厚 4/1	平底→胴部片	
54	30006	瓦器	甕	残高3.0	内子断片ナブ→(2長筒) 外子断片ナブ→トキキ	長形	横溝	内・灰2. 厚 5/1 外・横筋黄2. 厚 4/1	胴部片	
55	30006	瓦器	土器上蓋	横文付横28.2 残高1.1	内子断片ナブ 外子断片ナブ	長形	横溝→1cmの白色断片 を多く含む	内・灰2. 厚 7/2 外・灰2. 厚 6/1	底面片	胴+残あり

表8 II区出土遺物観察表2

番号	出土遺物	種別	図録	出典(sid)	調査	産地	船主	出所	保存	備考
66	5066	土師器	壺	菅元口径17.8 底径6.4	内:コナナギ→ヨスホナ 外:コナナギ→ナツホナ	良好	陶師→Iseの陶師を 含む	内:外-図2.10 6/6	以降調査 調査	
67	5066	瓦器器	杯蓋	菅元口径12.0 底径2.81	内:同型ナギ 外:同型ナギ→瓦葺器(内)→ナツホナ	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	内-調査2.10 6/1, 図表2.10 6/2 外-調査2.10 4/1, 図表2.10 4/2	以降調査	
68	5066	瓦器器	杯蓋	菅元2.6	内:同型ナギ 外:同型ナギ→瓦葺器(内)→ナツホナ	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	内:外-図2.10 5/1	以降調査	
69	5066	瓦器器	杯蓋	菅元口径12.8 底径3.0	内:同型ナギ 外:同型ナギ→瓦葺器(内)→ナツホナ	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	内:図2.10 6/3 外:図表2.10 6/3	以降調査	
70	5066	瓦器器	杯蓋	菅元口径14.0 底径3.1	内:同型ナギ 外:同型ナギ	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	内:図表2.10 6/2 外:図2.10 6/3	以降調査	
71	5066	瓦器器	壺	菅元3.6	内:同型ナギ→(高良型) 外:同型ナギ→ナツホナ	良好	陶師→Iseの白色・黄 色陶師を多く含む	内:図表2.10, 図表2.10 6/2 外:図表2.10 6/2	調査済	
72	5066	瓦器器	壺	菅元3.9	内:同型ナギ→(高良型) 外:同型ナギ→ナツホナ	良好	陶師→Iseの中層を主 とする	内:図表2.10 2/3 外:図2.10 2/4	調査済	
73	5066	瓦器器	壺	菅元3.1	内:同型ナギ 外:同型ナギ→高台ナギ(付)	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	内:調査2.10 3/1 外:オーリーブ図2.10 3/1	調査済	
74	5066	瓦器器	壺	菅元口径12.0 底径3.15	内:同型ナギ 外:同型ナギ→高台ナギ(付)	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	内:図表2.10 4/1 外:図表2.10 4/1	調査済	
75	武蔵	青銅	鏡	菅元3.6	内:コナナギ→高輪 外:コナナギ→高文→高輪	良好	鏡具	調査:図表2.10 7/1 輪:オーリーブ図表2.10 6/2	以降調査	
76	武蔵	鉄	鏡	菅元3.9	内:コナナギ→高輪 外:コナナギ→高文(付)→高輪	良好	陶師→Iseの陶師を主 とする	調査:図表2.10 8/2 輪:図表2.10 8/1	以降調査	
77	武蔵	銅鏡	鏡	菅元2.6	内:コナナギ→高輪 外:コナナギ→高文(付)→高輪	良好	陶師→Iseの白色陶師 を多く含む	調査:調査2.10 5/6 輪:調査2.10 6/1	以降調査	陶師発行
78	武蔵	鉄	小鏡	菅元1.83	内:コナナギ→高文(付)→高輪 外:コナナギ→高輪	良好	鏡具	調査:図表2.10 6/1 輪:調査2.10 6/2	以降調査	
79	武蔵	銅鏡	鏡	菅元2.5	内:コナナギ→高輪 外:コナナギ→高輪	良好	鏡具	調査:図表2.10 7/1 輪:図表2.10 6/2	以降調査	
80	武蔵	石版	打製 石鏡	径1.3 厚1.1 径0.25 重量0.25g		—	—	山田蔵 INV 47	以降調査	

表9 II区出土遺物観察表3

## 第4章 結 語

以上、竹並下ノ原遺跡の発掘調査成果を報告してきた。最後に結語として遺跡を通観して、その画期を見出したい。

竹並下ノ原遺跡で人々の営みを確認できるのは縄文時代の頃である。I区のSK036・037では前期の竊式や曾畑式系統の土器片が出土した。長軸1.0m、短軸0.7m程の長方形(楕円形)を呈し、底面に柱穴を有することを特徴とする。同様の土坑はI区の中央から東側にかけて散在し、打製石礫を伴うものもある。以上からこの土坑群はその分布や形態から狩猟用の落とし穴と考えることができる。底面の柱穴は逆茂木の痕跡であろう。

続く画期は弥生時代にある。I区の西側で見つかったSI002は直径約11mの大型の竪穴建物で、面積は約95㎡もあり、支配者層の住居と考えることができよう。遠賀川以東では最大規模の円形住居である(坂元2006)。出土した弥生土器の様相(武末・上田2006)より、弥生時代の前期末(板付Ⅱc式期)に位置づけることができ、他にも多くの石器に加え、床面では多量の炭化材を検出した。この炭化材の詳細については次章の自然科学分析で報告にかえたい。東側で確認したSI007・008も同時期の竪穴建物と考えられる。近隣では竹並遺跡のA地区で同時期の集落が調査されている(竹並遺跡調査会1979)。

その後は弥生時代中・後期、古墳時代前・中期と明確な遺構を認めることができない。再び活動が盛んになるのは古墳時代後期の末頃からである。ここに第3の画期がある。この時期にはI区に地域の有力者を埋葬したヒメコ塚古墳が築造される(行橋市教育委員会2014)。古墳の周りには同時期の竪穴建物(I区:SI001・004・006・009など、II区:SI001・002)があり、集落域に古墳を取り込んだ集落景観をうかがえる。II区では集落を区画するこの時期の溝も調査されている。南側の丘陵上には千基以上の横穴墓が密集する竹並遺跡(横穴墓)があり、その一部は古墳時代の竹並下ノ原村を営んだ人々の墓所と想像できる。

古代、中世はごく少量の遺物はあるもののまとまった遺構はない。最後の画期は江戸時代である。I区のSK031・032、SE053では江戸時代後期(18世紀後期以降)と思われる多くの陶磁器等が出土した。当地の江戸時代の様相については、近接する福原原開遺跡の調査報告でも触れたことがある(行橋市教育委員会2013)。本遺跡を2分する国道496号線は在郷町大橋から福富を經由し国分方面に至る脇街道として江戸時代前期には成立しており、竹並村は元和元年の「人番改帳」には家数36、人数96と記録されている(平凡社地方資料センター2004)。今回の調査成果は、その様相を具体的に示すものではないが、限られた文献史料からみえる当地域の歴史像を補完するものといえよう。

### 〈引用・参考文献〉

- 坂元雄紀2006『遠賀川流域における弥生集落の成立と展開』『弥生集落の成立と展開』(第55回埋蔵文化財研究集会)
- 武末純一・上田龍児2006『弥生土器の編年と地域間交流』(行橋市史編纂委員会編『行橋市史資料編 原始・古代』行橋市)
- 竹並遺跡調査会編1979『竹並遺跡』東出版事楽社
- 平凡社地方資料センター編2004『福岡県の地名』(日本歴史地名大系第41巻)平凡社
- 行橋市教育委員会2013『柳井下ノ原遺跡・福原原開遺跡・竹並下ノ原遺跡2』(行橋市文化財調査報告書第48集)
- 行橋市教育委員会2014『ヒメコ塚古墳』(行橋市文化財調査報告書第49集)
- ※結語をまとめるにあたり、以下の方々に有益なご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。(敬称略)
- 上田龍児・森貴教(大野城市教育委員会)、佐藤浩司(公益財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室)
- 能登原孝道(熊本県教育委員会)

# 第5章 付 編

## 竹並下ノ原遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

竹並下ノ原遺跡の1区の弥生時代前期末頃と考えられるSI002から出土した炭化材を対象として、年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、SI002の炭化材で、番号を付して取り上げられた32点(炭1～32)と、ベルト中から出土した炭化材1点の合計34点がある。このうち、炭7は、炭7-1と炭7-2の2袋に分けられている。年代測定は、試料の状況を観察した上で、炭7-1と炭22の2点について実施する。いずれも破片で樹皮は認められないが、比較的大型の破片がある。それぞれ、残存する中での最外年輪を含む4-5年分を採取して測定試料とした。

### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来

的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$  ( $\sigma$ は統計的に真の値が68%、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

## (2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表10、暦年較正結果の比較を第47図に示す。同位体

地区 遺構 番号	種類	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.		
						誤差	cal BC/AD		cal BP		相対比	
							1 $\sigma$	2 $\sigma$	1 $\sigma$			2 $\sigma$
1-b区 住居1 炭7-1	炭化材	AAA	2,230 $\pm$ 20	-23.70 $\pm$ 0.19	2,260 $\pm$ 20 (2,255 $\pm$ 23)	1 $\sigma$	cal BC 385 - cal BC 357	cal AD 2,334 - 2,306	cal BP 2,334 - 2,306	0.483	IAAA- 131933	
							cal BC 283 - cal BC 255	cal AD 2,232 - 2,204	cal BP 2,232 - 2,204	0.306		
						2 $\sigma$	cal BC 247 - cal BC 235	cal AD 2,196 - 2,184	cal BP 2,196 - 2,184	0.127		
							cal BC 393 - cal BC 351	cal AD 2,342 - 2,300	cal BP 2,342 - 2,300	0.410		
1-b区 住居1 炭22	炭化材	AAA	2,250 $\pm$ 20	-24.05 $\pm$ 0.34	2,270 $\pm$ 20 (2,269 $\pm$ 22)	1 $\sigma$	cal BC 392 - cal BC 359	cal AD 2,341 - 2,308	cal BP 2,341 - 2,308	0.809	IAAA- 131934	
							cal BC 274 - cal BC 260	cal AD 2,223 - 2,209	cal BP 2,223 - 2,209	0.191		
						2 $\sigma$	cal BC 397 - cal BC 353	cal AD 2,346 - 2,302	cal BP 2,346 - 2,302	0.621		
							cal BC 293 - cal BC 230	cal AD 2,242 - 2,179	cal BP 2,242 - 2,179	0.377		
						cal BC 217 - cal BC 215	cal AD 2,166 - 2,164	cal BP 2,166 - 2,164	0.002			

1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5668年を使用した。

3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

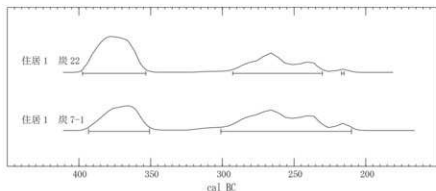
6) 暦年の計算には、補正年代に0で暦年較正用年代として示した、一行目を丸める前の値を使用している。

7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は $1\sigma$ は68.3%、 $2\sigma$ は95.4%である

9) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表10 放射性炭素年代測定結果



第47図 暦年較正結果の比較

効果の補正を行った測定結果（補正年代）は、炭 7-1 が  $2,260 \pm 20BP$ 、炭 22 が  $2,270 \pm 20BP$  である。また、測定誤差を  $2\sigma$  で計算した暦年較正結果は、炭 7-1 が cal BC393-210、炭 22 が cal BC397-215 である。

## (2) 樹種同定

樹種同定結果を表 11 に示す。炭化材は、広葉樹 7 分類群（コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・サクラ属・ハゼノキ類・カキノキ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3～4 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高。

地区	遺構	番号等	状態	種類	備考
I 区	SI002	炭1	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭2	破片	ツブラジイ	
I 区	SI002	炭3	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭4	破片	ツブラジイ	
I 区	SI002	炭5	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭6	破片	サクラ属	
I 区	SI002	炭7-1	破片	ハゼノキ類	AMS実施
I 区	SI002	炭7-2	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭8	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭9	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭10	破片	サクラ属	
I 区	SI002	炭11	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭12	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭13	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭14	破片	コナラ属アカガシ亜属	
I 区	SI002	炭15	破片	クリ	
I 区	SI002	炭16	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭17	破片	コナラ属アカガシ亜属	
I 区	SI002	炭18	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭19	破片	カキノキ属	
I 区	SI002	炭20	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭21	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭22	破片	スダジイ	AMS実施
I 区	SI002	炭23	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭24	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭25	破片	ツブラジイ	
I 区	SI002	炭26	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭27	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭28	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭29	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭30	破片	ハゼノキ類	
I 区	SI002	炭31	破片	ツブラジイ	
I 区	SI002	炭32	破片	スダジイ	
I 区	SI002	炭ベルトの中	破片	コナラ属アカガシ亜属	

表 11 樹種同定結果



・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもと集合～複合放射組織とがある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

ツブラジイとスダジイは、集合～複合放射組織の有無で区別しているが、ツブラジイの集合～複合放射組織の出現頻度は個体によって大きく異なり、ほとんど認められない個体もある。そのため、スダジイとした中には、集合～複合放射組織の出現頻度の低いツブラジイが混じっている可能性がある。本報告では、集合～複合放射組織が認められた個体をツブラジイ、認められなかった個体をスダジイとして報告する。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、道管の壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・ハゼノキ類 (*Rhus*) ウルシ科ウルシ属

散孔材で、道管壁はやや厚く、横断面では楕円形、単独または2～4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

ハゼノキ類には、ウルシ属のうち、ハゼノキとヤマハゼが含まれるが、組織から区別できず、ハゼノキ類としている。

・カキノキ属 (*Diospyros*) カキノキ科

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2～4個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、10～20細胞高。層状配列は明瞭ではない。

## 4. 考察

### (1) 住居跡の年代

住居跡は、出土土器などから、弥生時代前期後半と考えられている。炭化材2点の年代測定結果は、補正年代が2,260 ± 20BPと2,270 ± 20BP、暦年較正年代はcal BC393-210とcal BC397-215であった。福岡県内における弥生時代前期の土器付着物等を対象とした年代測定の値をみると、板付Ⅰc式で2,520 ± 40BP、板付Ⅰb～Ⅱa式で2,540 ± 40BP、板付Ⅱb～Ⅱc式で2,520 ± 40BP、板付Ⅱb式で2,540 ± 50BP、板付Ⅱc式で2,510 ± 40BP、夜白Ⅱb式で2,510 ± 35BP、2,550 ± 40BP等、弥生時代中期では城の腰式または須玖Ⅰ式古で2,240 ± 40BP、須玖式甕棺で2,230 ± 40BP、須玖Ⅰ式で2,340 ± 50BP、須玖Ⅰ式新で2,240 ± 40BP、須玖Ⅱ式新で2,110 ± 40BP等の補正年代値が報告されている(西本2006)。

これらの事例と比較すると、今回の補正年代は弥生時代中期の年代に比定される可能性が高い。今後、出土土器も含めて測定値を評価することが望まれる。

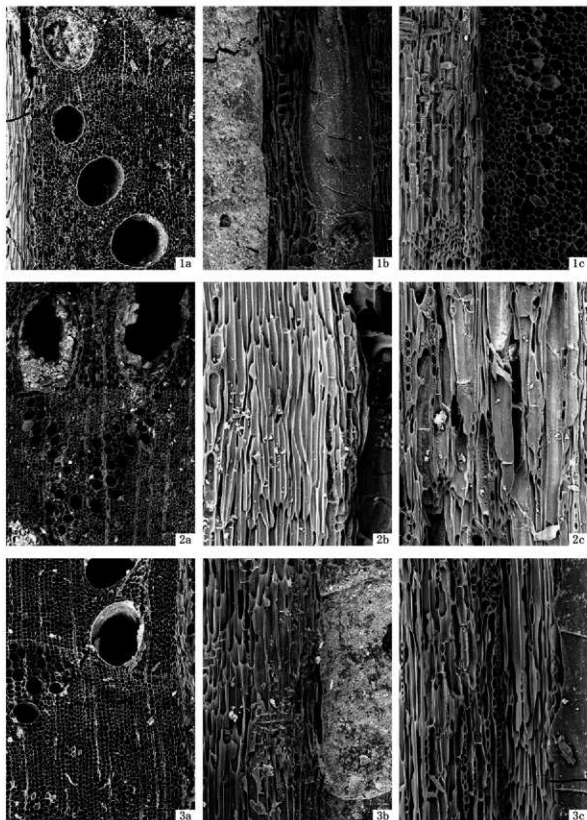
## (2) 木材利用

SI002 から出土した炭化材は、いずれも破片であり、元の形状を復元するのは難しいが、いずれの試料にも樹芯や樹芯に近い位置が認められないことから、分割材が利用された可能性がある。これらの炭化材は、全て広葉樹であり、ツブラジイ・スダジイを中心に7種類が認められた。いずれも比較的重硬で強度が高い材質を有しており、建築部材として強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。

ツブラジイとスダジイは、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種であり、主に沿海地の丘陵尾根筋に多い。その他の種類も、常緑広葉樹林を構成する種類や、その二次林を構成する種類である。ツブラジイやスダジイが多い背景には、周辺地域にツブラジイやスダジイを主とした常緑広葉樹林が見られ、木材の入手が容易であったことが推定される。

## 引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. コナラ属アカガシ亜属(住居1;炭14)

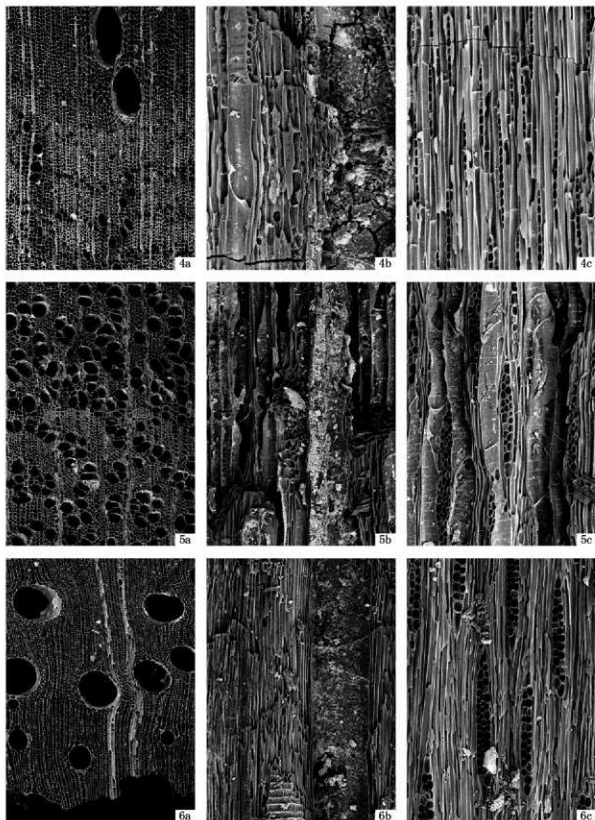
2. クリ(住居1;炭15)

3. ツブラジイ(住居1;炭4)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

100  $\mu$ m: a  
100  $\mu$ m: b, c

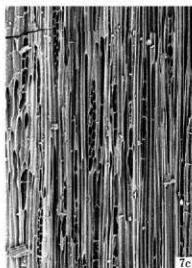
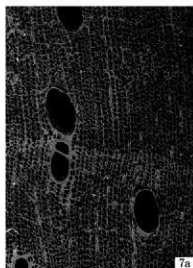
第48図 木材(1)



4. スダジイ(住居1;炭32)  
 5. サクラ属(住居1;炭10)  
 6. ハゼノキ類(住居1;炭9)  
 a:木口, b:縦目, c:板目

100  $\mu$  m: a  
 100  $\mu$  m: b, c

第49図 炭化材(2)



7. カキノキ属(住居1:炭19)  
a:木口, b:柁目, c:板目

100  $\mu$  m: a  
100  $\mu$  m: b, c

第50図 炭化材(3)

# 图 版



(1960年6月5日撮影 国土地理院発行を転載)

竹並下ノ原遺跡の位置



1区西側（上が北）





1区西側反転後（上が南西）



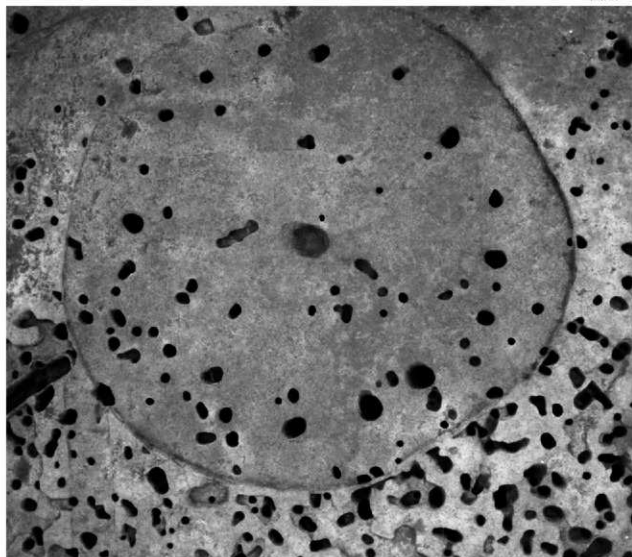
1区東側（上が北西）



1区東側反転後（上が南西）



1区からⅡ区を望む（東から）



1. SI002 (上が南東)



2. SI002 (南から)



1. SI001 (北から)



2. SI003 (西から)

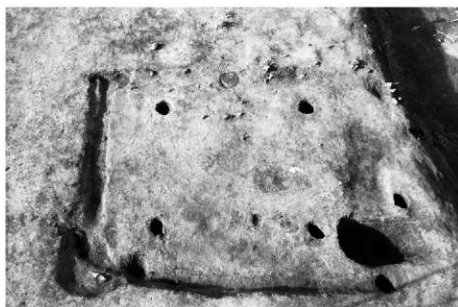


3. SI004 (南から)

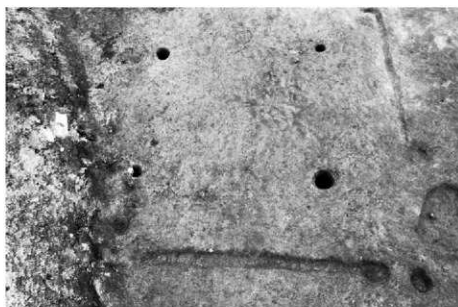
1. SI004 土器出土状況  
(北から)

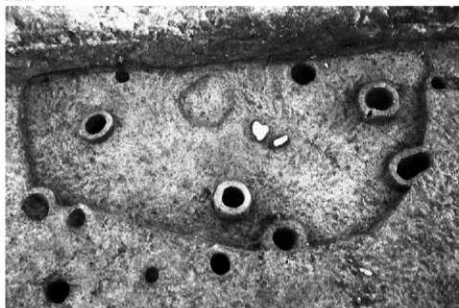


2. SI005 (南から)

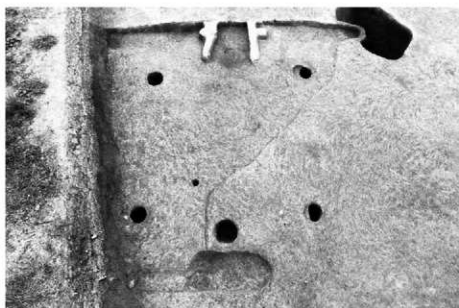


3. SI006 (南から)





1. SI007 (西から)



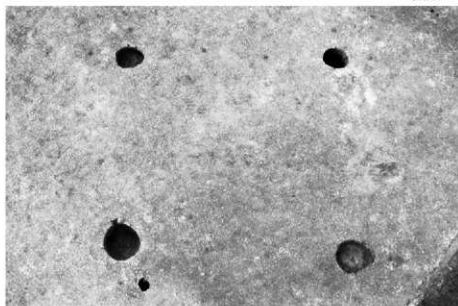
2. SI009 (南東から)



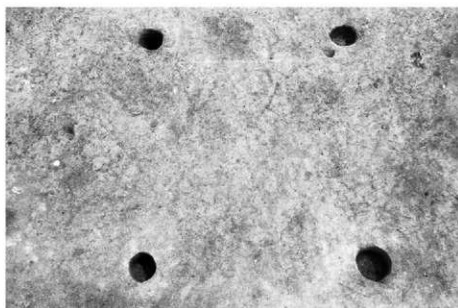
3. SI009 カマド土器出土状況  
(南東から)



1. SB010 (北から)

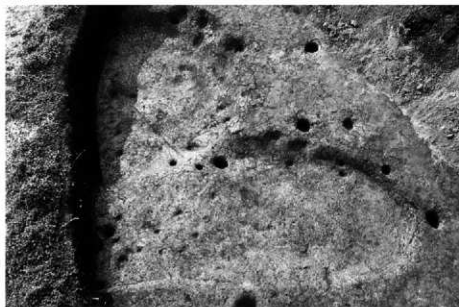


2. SB011 (東から)

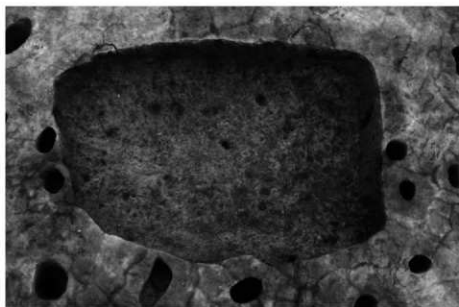


3. SK013 (西から)

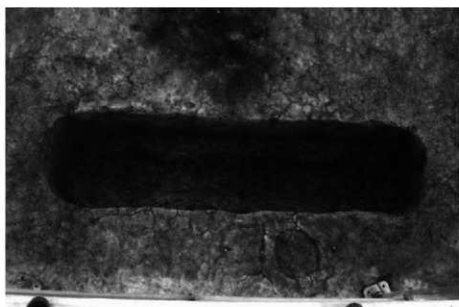




1. SK016 (東から)

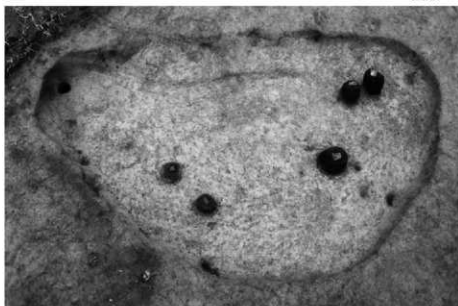


2. SK017 (南東から)

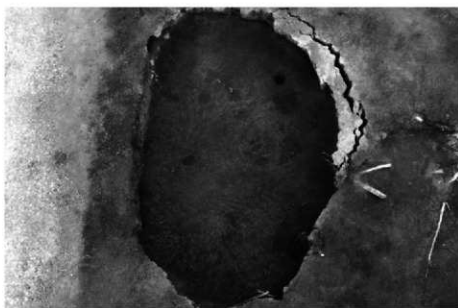


3. SK020 (東から)

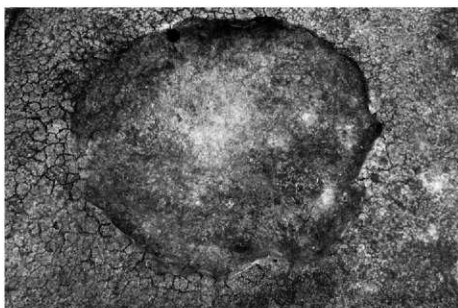
1. SK022 (東から)



2. SK023 (南から)

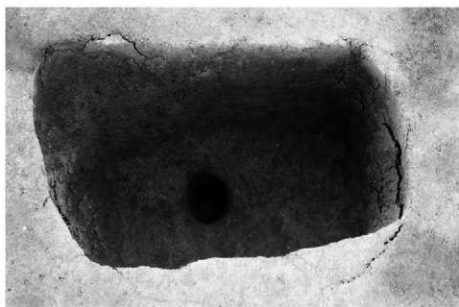


3. SK024 (南から)





1. SK026 (北から)



2. SK026 (北から)

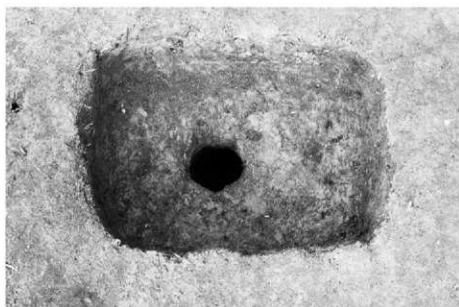


3. SK027 (西から)

1. SK028 (北から)



2. SK029 (南東から)

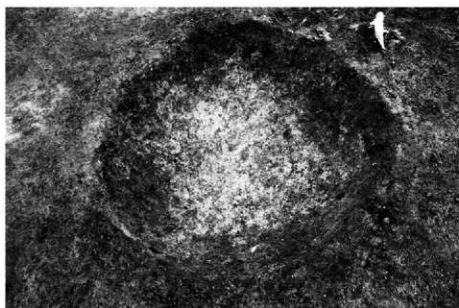


3. SK030 (西から)





1. SK031 (西から)



2. SK032 (西から)



3. SK033 (東から)



1. SK034 (南から)



2. SK035 (北西から)



3. SK036 土器出土状況



1. SK036 (南から)

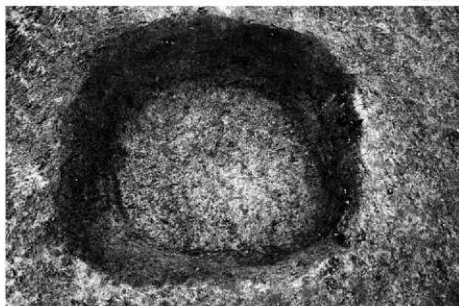


2. SK037 (南から)

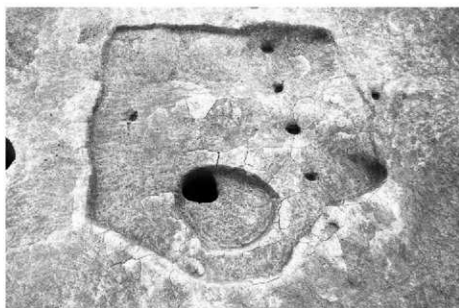


3. SK038 (東から)





1. SK040 (東から)



2. SK044 (北東から)



3. SK045 (北から)



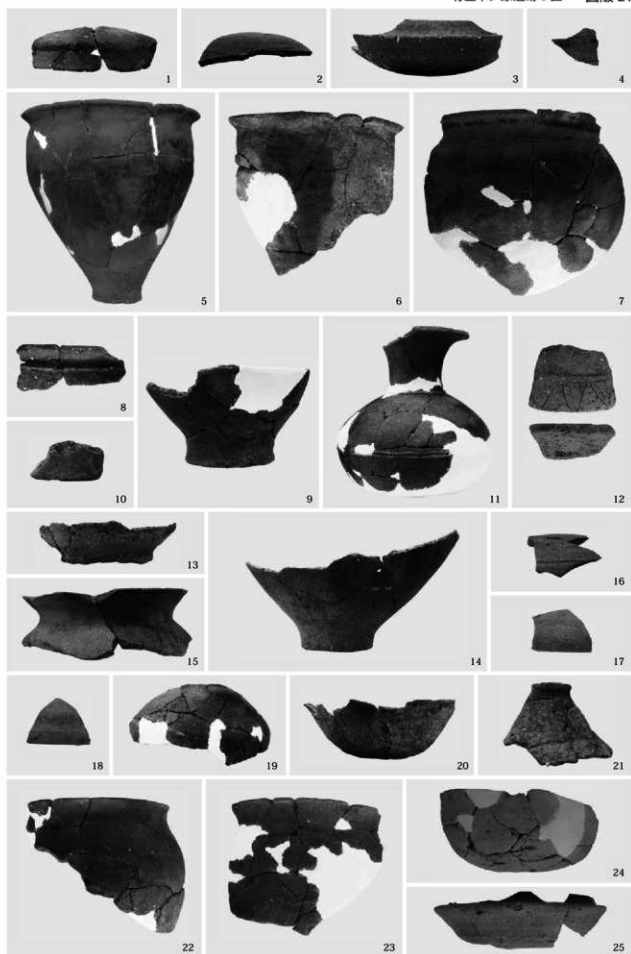
1. SK046 (北から)

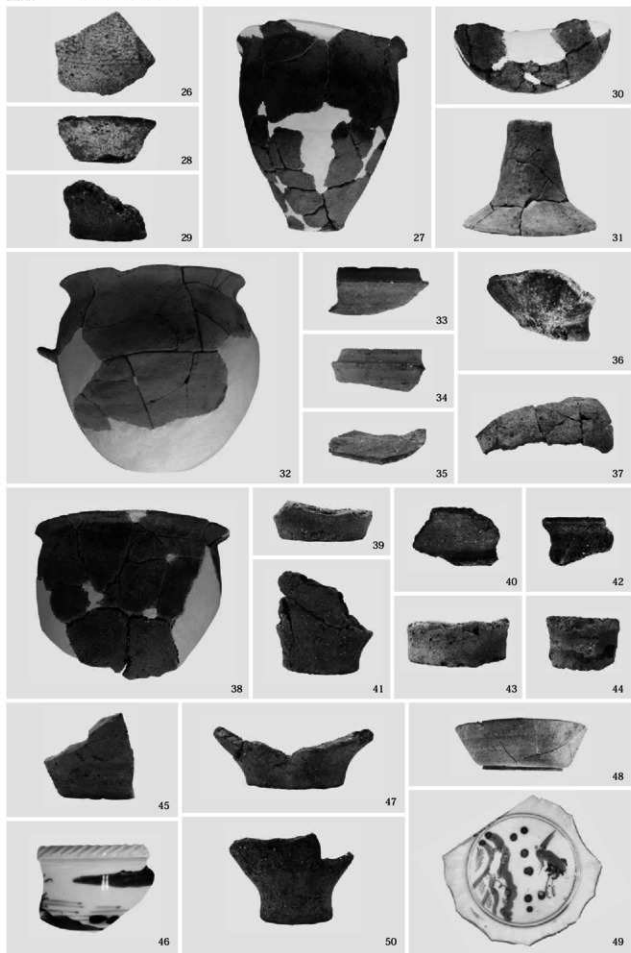


2. SD050 土層



3. SE053 (北から)

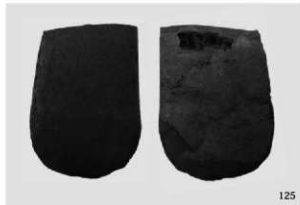




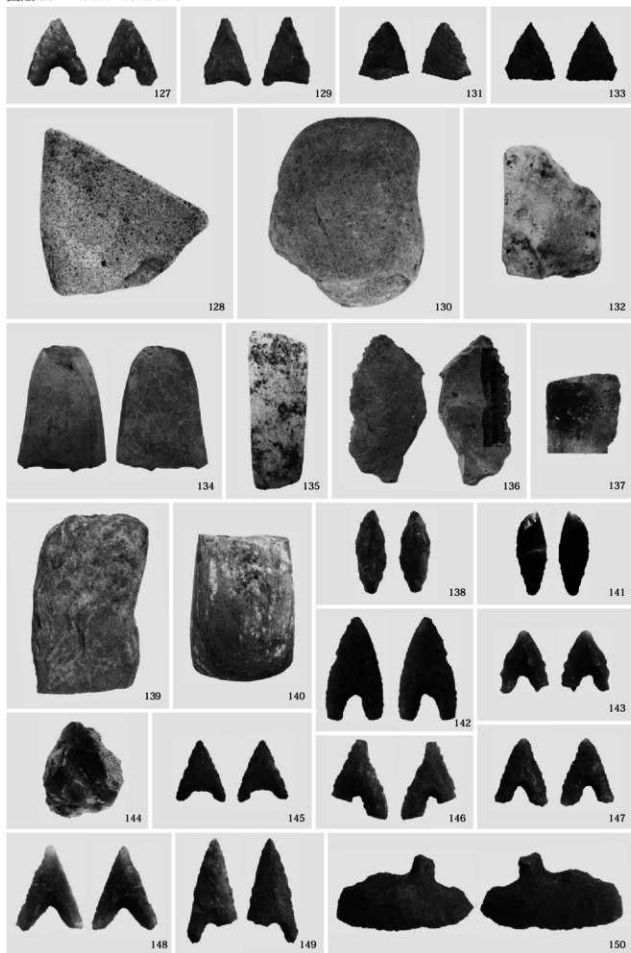


図版 24 竹並下ノ原遺跡I区





図版 26 竹並下ノ原遺跡Ⅱ区







1. Ⅱ区全景（上が西）



1. Ⅱ区東側（上が西）



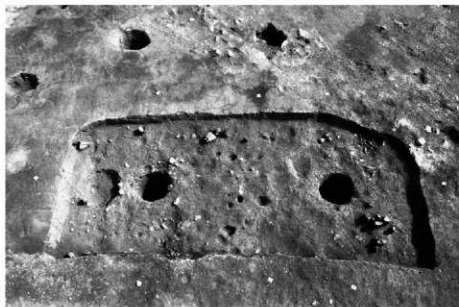
2. Ⅱ区全景（東から）



1. Ⅱ区北側（西から）



2. Ⅱ区東側（北西から）



1. SI001 (南西から)



2. SI002 (南西から)



3. SB003 検出状況(南から)

1. SB003 (南から)



2. SK004 (東から)



3. SD005 (西から)





1. SD005 東側（北西から）



2. SD005 ベルト A 断面  
（西から）



3. SD005 ベルト B 断面  
（西から）

1. SD005 ベルト C 断面  
(西から)



2. SD005 ベルト D 断面  
(西から)



3. SD005 土器出土状況

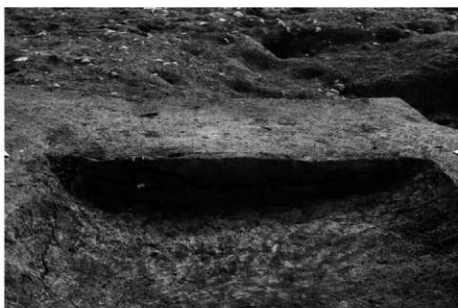




1. SD006 西側 (東から)



2. SD006 東側 (西から)



3. SD006 ベルト A 断面 (西から)



1. SD006 ベルト B 断面  
(西から)



2. SD007 北壁土層  
(南から)



3. SD008 (東から)





1. SD008 ベルト断面  
(北西から)



2. SD008 北壁土層(南から)



3. SD009 (西から)



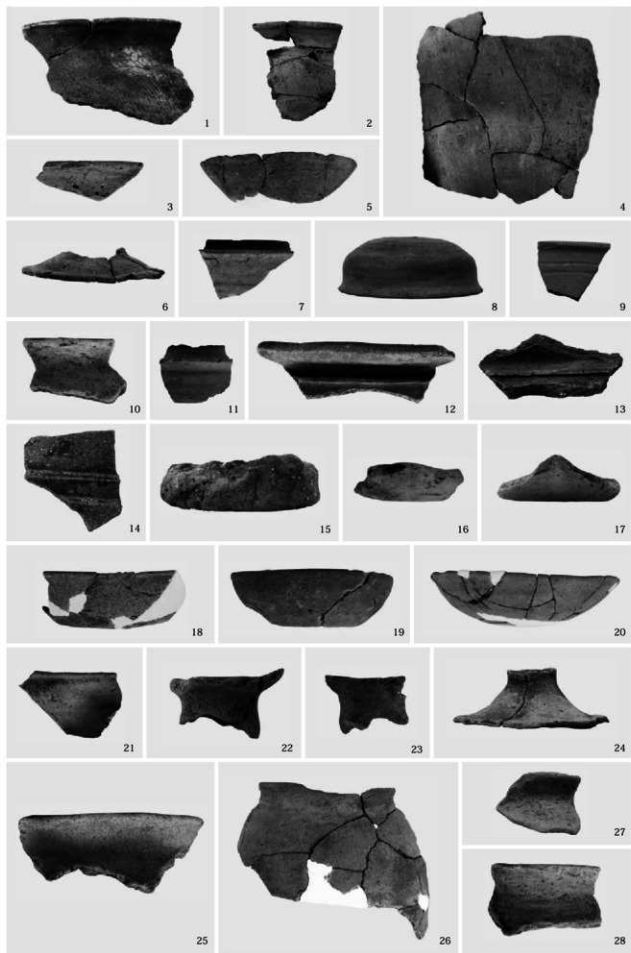
1. SD010 (南東から)



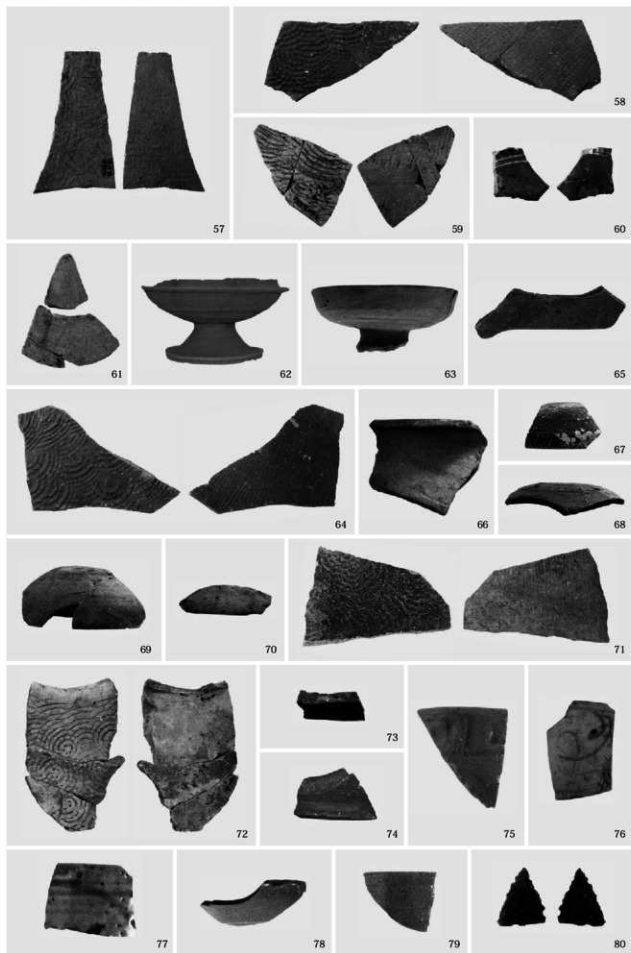
2. SA011 (南東から)



3. 調査区土層







# 報告書抄録

ふりがな	たけなみしものほらいせき							
書名	竹並下ノ原遺跡							
副書名	東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告3							
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	山口裕平							
編集機関	行橋市教育委員会							
所在地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号 TEL 0930-25-1111 FAX 0930-25-1582							
発行年月日	2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たけなみしものほらいせき 竹並下ノ原遺跡	福岡県行橋市 南泉2丁目691、 同4丁目635ほか	402133	14075005	33° 41' 58"	130° 58' 47"	20100601 ～ 20110331	10,990㎡	東九州 自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下崎下ノ原遺跡	集落	縄文時代～江戸時代	竪穴建物、掘立柱建物 土坑、溝、井戸	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、陶磁器、 石畿、石斧、石廬丁				
要約	<p>京都平野のほぼ中央、標高15～19m前後の中位段丘に立地する。</p> <p>縄文時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。</p> <p>縄文時代は前期の落とし穴を確認した。続く弥生時代には前期末頃の竪穴建物を3軒調査したが、そのうちの1つは遠賀川以東で最大級のものである。古墳時代後期にはヒメコ塚古墳が築かれたが、その周辺には複数の竪穴建物があり、古墳を集落域に取り込んだ当時の集落設計を考えることができる。江戸時代には脇街道に接する位置にあたり、複数の遺構から多種多様の陶磁器等が出土した。</p>							

2015年(平成27年)3月31日 発行

## 竹並下ノ原遺跡

行橋市文化財調査報告書 第55集

著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目1番1号

発行 行橋市教育委員会

印刷 福岡県行橋市大橋三丁目1番18号  
はら印刷